

第21回

全国
高校生

創作 コンテスト 入賞作品集

短篇小説の部

現代詩の部

短歌の部

俳句の部

もっと日本を。もっと世界へ。



國學院大學

高校生新聞®

第21回 全国高校生「創作コンテスト」 作 品 集



平成29年12月3日 表彰式
於 國學院大學

國學院大學
高校生新聞社

巻頭言

学長 赤井 益久

第二十一回「全国高校生創作コンテスト」に多数のご応募をいただきまして、まことに有り難うございました。また、今回入賞の方々には、心よりお祝い申し上げます。平素、高等学校の教育現場において指導に携わっておられる先生方、また厳正な審査に当たられた先生方に心より御礼申し上げます。

現在、社会から大学に要請されている課題に、コミュニケーション能力の養成や協調性、多様性などの涵養があります。社会に出て、他者との協調性やコミュニケーション能力の養成や協調性、多様性などでもありません。他者との意思疎通、十分なコミュニケーションを形成するうえで、最も重要なことは自分の思いや感じたことを自らの言葉で的確に人に伝えることです。これは簡単ないように見えますが、そうではありません。正しい表現やその場にふさわしい言葉使いに慣れておく必要があります。正確に表現するには、練習や鍛錬が求められます。

その上で、自分らしい表現や個性がそこに発揮されることが望ましいのです。皆さんは作品を書かれるときに、それを痛感されたことでしょうか。自分で感じたことをどう表現するのか、これはそう容易ではありません。自分の思いを人に伝える大切さと共に、伝える内容を自分で考えることが貴重なのです。こうした習慣が日々の日常生活の場で培われることにより、何を伝えるかと同時にどのように伝えるかが重要であることが理解されます。

これから、「考えること」「思うこと」「感じること」を大事にして、それを自分の言葉で綴ることを続けていって欲しいと思います。創作文芸は、それらの経験と鍛錬の上に花開く精華であろうと思います。美しい日本語を学び、身につけ、それを使いこなす日本人として成長していただきたいと願っています。

今回受賞の栄に浴した人も、今回は惜しくも入賞に至らなかった人も、「表現者」としてこれから日本に伝わる文芸様式を大切にし、引き続き自らの感性を研ぎ、表現を磨き、創作活動を継続していつて欲しいと思います。

國學院大學は、大学における基本的学力に日本語の養成を掲げております。また、わが国に伝わる伝統的な文芸を「國學院科目」として学生の必須の教養に指定しております。皆さんの中から大学に進学され、引き続き創作活動が続ける方々、生涯にわたって創作文芸に挑戦される方々が誕生することを願っています。

目次

巻頭言		國學院大學	学長	赤井 益久	
短篇小説の部					
最優秀賞	『ハンバーク爆弾』	茨城県立日立北高等学校	三年	大貫 瑠香	1
優秀賞	『青を焚く』	福岡県立福岡講倫館高等学校	三年	紀川 晴好	5
優秀賞	『春の七草』	山口県立徳山高等学校	三年	芳岡 未那	8
佳作	『感情エネルギーの法則』	横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校	二年	長谷川 佐和	11
佳作	『椿葉うさぎ』	千葉・国府台女子学院高等部	二年	佐藤 朱里	15
佳作	『実り』	千葉県立東葛飾高等学校	二年	生天目 咲樹	18
佳作	『泳がない人』	大阪府立岸和田高等学校	二年	中庭 里沙	20
佳作	『ナナコ』	熊本県立御船高等学校	一年	白石 明代	23
入選作品					25
選評		作家	井上 孝雄		26
現代詩の部					
最優秀賞	『道端に枯れた花』	神奈川県立麻生高等学校	二年	丸山 優月	27
優秀賞	『辞書を引く』	神奈川県立横浜翠嵐高等学校	二年	伊集院 亜衣	28
優秀賞	『クレイハートの臨床試験』	神奈川県立麻生高等学校	三年	山崎 早恵	29
佳作	『時間』	神奈川県立麻生高等学校	二年	関谷 実咲	30
佳作	『女の子』	宮城・聖ウルスラ学院英智高等学校	三年	金森 悠夏	31
佳作	『The West Exit. (西口)』	埼玉県立鴻巣高等学校	二年	加藤 優奈	32
佳作	『雨の日』	香川県立観音寺第一高等学校	二年	宇草 和弥	33
佳作	『虚偽の申告』	神奈川県立横浜翠嵐高等学校	三年	原 唯菜	34

入選……………	『昼夜と電車』……………	埼玉県立深谷商業高等学校	一年	柳田 琴音	35
入選……………	『意識』……………	群馬県立桐生女子高等学校	一年	沖村 南美	35
入選……………	『十分 じゅうぶん （或いは放課後）』……………	奈良県立奈良北高等学校	三年	山野あやね	36
入選……………	『海と人間』……………	長野県諏訪清陵高等学校	三年	小野木葉月	36
入選……………	『そして私は制服を着る』……………	神奈川県立麻生高等学校	三年	村松 苗青	37
入選……………	『慈悲深き希望論』……………	神奈川県立麻生高等学校	二年	川嶋美沙希	37
入選……………	『僕には聞こえない』……………	神奈川県立麻生高等学校	二年	小村 瑠菜	38
入選……………	『色鉛筆のはぐれ者』……………	神奈川県立麻生高等学校	二年	矢田安侑子	38
入選……………	『画面の向こう』……………	東京・麹町学園女子高等学校	二年	内山 綾	39
入選……………	『ごんご』……………	岡山・津山工業高等専門学校	二年	石井 琢朗	39
選評……………	……………	……………	詩人	水無田気流	40
最優秀賞・優秀賞・佳作・入選作品……………	……………	……………	……………	……………	41
選評……………	……………	……………	歌人	田中 章義	43
最優秀賞・優秀賞・佳作・入選作品……………	……………	……………	……………	……………	44
選評……………	……………	……………	俳人	堀本 裕樹	46
第二十一回全国高校生「創作コンテスト」受賞者一覧……………	……………	……………	……………	……………	47
第二十一回全国高校生「創作コンテスト」応募総数……………	……………	……………	……………	……………	48
後記……………	……………	……………	……………	……………	49

最優秀賞

ハンバーグ爆弾

茨城県立日立北高等学校 三年

大貫 瑠香

ハンバーグのタネをこねていると、この肉塊の中に爆弾が入っているんじゃないかと思う。想像を振り払うように首を振って、巨大な肉の塊をこね続ける。息を吸うことさえ苦しい真夏の十八時の空気に溺れながら、手早く夕食の準備をしていた。

我が家のハンバーグは直径二十五センチほどで、その大きさと肉汁が飛び出す様子から親戚の間ではハンバーグ爆弾と呼ばれている。お盆の時期になって親戚一同が集まると食卓には必ずこれが出てくる。

「里香、みんな来たんけ？」

流し台で米をとぐばあちゃんが大声で言った。

「花火買いに行ってるって言ったっぺよ」

「そおか」

まるで「そんなこと言われてなかったけど」とでも言いたげなその口調に、内心舌打ちをする。

一時間前も同じことを聞いてきたばあちゃんへ抱く、虚しさに似た感情をどうしていいか分からない。上履きの裏に深く刺さった画鋲を発見した時の様な、行き場の無い苛立ちを無理やり飲み込んだ。

早くに両親を亡くして以来、私がこうやって高校三年生になるまで育ててくれたことには勿論感謝している。だからこそ、灰色の感情が渦巻く。ばあちゃんもいつか私のことを忘れるのだろうか。それがどうしようもなく恐ろしい。

私は人に忘れられるという、心臓を貫かれるような哀しみを知っていた。

「りい、また背が伸びたんじゃねーの？」

茨城弁特有の語尾の上がった口調で私を褒めるじいちゃんの声。じいちゃんが亡くなってから四年が経った今でも鮮明に思い出すことができる。

私の家族と呼べる存在は、母方の祖母と父方の祖父だけだ。

幼い頃に両親を失った私を、じいちゃん是谁よりも甘やかしてくれた。それで従兄弟たちからはブーイングを喰らうことも多々あった。中でも同い年の銀二くんはじいちゃんによく懐いていて、私がこっそりお菓子を買ってもらおうと玄関で地団駄を踏みながら「りいばかりずるい」と大泣きしていた。じいちゃんは決まって「決めつけは良くねえ。銀にはいつも買ってあげてるでしょうよ」となだめるように銀二くんの頭を優しく叩いた。

時間の流れに反比例するかのように私とじいちゃんは会う機会が少なくなった。私は母方のばあちゃんの家引き取られたのだから、父が死んだ今、じいちゃんと関わる必要性はあまり無い。幼い頃は気にも留めていなかった事実が、いつの間にか父方の親族と会う機会を跡形もなく消し去ってしまった。

それを酷く後悔したのは中学二年生の時。

「呆けてるからりいちゃんのこと忘れてると思うけど最期に来てくれなにかしら」

じいちゃんと同居していた叔母にそう言われて、暗闇に突き落とされ

た心地を引きずりながら病室へ向かった。もう長くない。もう私のことを忘れていた。後頭部を鈍器で殴られたような衝撃に吐き気がした。

「ばあちゃん、味噌汁とハンバーグのたね出来たよ」

「んなら休憩しな。全員集まったら呼ぶから」

ハンバーグ用の大皿を用意し、私は逃げるようにキッチンを後にする。思い出したくないことが脳裏に浮かんでくると何処か遠くへ行きたくなってしまふ。その所為だ。

エプロンを脱いで、それを洗濯籠に入れるために脱衣所へ向かう。居間の前を横切った時、テーブルの上の本が目に入った。

「また背が伸びたな」

じいちゃんの言葉がフラッシュバックする。額を手で押さえた。

弱々しく放たれた声が鳶のように心に絡みついて離れない。それはじいちゃんの最期の言葉だった。

じいちゃんは最期の時間、もう私のことなんてとくに忘れていた。それでも口癖のように言っていたあの言葉は、それだけは覚えていてくれた。その言葉を残して息を引き取った。

もっと話しておけばよかったという後悔の念の反面、私は鎖から解放されたような喜びを感じた。ただ、嬉しかった。

それなのに何故。

テーブルの本をゆつくりと手に取る。ガラガラとした表紙の感触と共に「忘れない言葉」と明朝体で書かれたタイトルが目飛び込んできた。帯には「これは僕の実体験です」という文字が大きく書かれている。

作者の名前は松本銀。本名は葵銀二。高校三年生の新人作家。

紛れもない、私の従兄。

本の帯にある「祖父の最期の言葉は、思い出の言葉だった」という文字をぐつと噛み締めて吐き捨てる。

実体験が元なら、じいちゃんの最期の言葉は銀二くんへの言葉じゃな

い。じいちゃんはいつも彼に「銀二は本が好きだな」と言っていた。

あの時は確かに、私に言っていたんだ。

私はこの本を一度も読んだことが無い。表紙に触ることさえ見えない壁があるような抵抗感を感じていた。そしてこの本がテレビに取り上げられるほど有名になって、私は裏切られたような虚しさを抱いた。

「また背が伸びたな」

この言葉は一体誰のものなのだろう。

ばあちゃんも私を忘れるのではないかという不安。大事な思い出を利用されたことへの苛立ち。心の中の手が届かないほど奥に押し込められた薄暗い感情が、凝縮されて一つの爆弾のようになっていく。

それがいつか爆発するのではないかと、自分自身に恐怖を感じていた。私が本を手にとったまま固まっていると、キッチンからばあちゃんの声がした。

「本、読んであげな」

珍しく大声ではない、淡々とした口調だった。

「決めつけんなって、あっちのお父さんも言ってたろ」

一時間前の私の言葉は少し歩くだけで忘れてしまうのに、心のしかかるような言葉だけ覚えているのだからたちが悪い。けれどばあちゃんがまだこうやって思い出せるという事実には半ば安心している自分も居て、私は「あつそ」とそっけなく言った後、細い安堵の息を漏らした。

この安堵がいけなかったのだろう。私は本を手にとって早足で自室へ向かった。

木の扉を乱雑に閉め、部屋の電気をつける。読書をするだけだというのに心臓の音がうるさい。誰かの脳内を盗み見ているような、緊張感と罪悪感。何も悪いことをしていないのに指が震えていた。

ゆつくりと表紙を開く。

『脳内に巨大なハンバーグが寝転んでいる。従妹が、私も手伝ったんだ

よ」と言った時の一等星のような笑顔と共に。」

一行目の明らかに私を意味する描写に、言葉を失った。その衝撃を皮切りに時間の流れを感じさせない物語の世界に溺れる。

認知症になってしまった祖父の介護をしていた日々を、葬儀の中で主人公が思い返すストーリー。

紡がれる一言一句に心を震わせながら、私は大きくずれた勘違いをしていた事に気が付く。帯に書かれた「実体験」とは、本当に彼の実体験だったのだ。遺産目当てに家に入りこんでくる遠い親戚。介護疲れにより八つ当たりしてくる家族達。それらの描写全てが、想像で書いたにだけは生々しすぎる。

ラストシーンで、祖父と最期の別れをする主人公。祖父は「大きくなったな」と消え入るような声で呟き、息を引き取った。

読み終えてもなお、物語の世界で息をしている。そこから抜け出すには時間と力が要りそうだ。

「おーい！ りい姉！ はーなーびー！」

本に囚われたままの心に無垢な声が響く。一番年下の従弟の声だ。

私は心を奪われたままの空っぽの体で玄関に向かった。玄関先から見える外の景色はもう既に暗闇が支配しているが、その中に眩しい火花が煌めいていた。

「りい姉、花火やろー！」

「ちょっと待ってて」

そう返事をして、靴置き場で従兄弟たちの花火に火をつけてあげている彼をちらりと流し見た。私はゆっくりと玄関先に腰を下ろす。銀二くんは男にしては長めの髪を耳にかけて、ロウソクの火を見ている。その背中はやけに大人びていて、十八歳ということ忘れてしまいそうだった。

「あのさ、本、読んだよ」

「……そう」

銀二くんはそれだけしか言わない。次の会話の切り口が思いつかなくて、私はため息交じりに深呼吸をした。

「怒ってるよね」

突如、彼が火傷しそうなほど冷ややかな声で呟いた。

「なんで？」

私がそう尋ねると、彼の鉄のような表情が少しばかり崩れた。

「だって実体験って嘘ついたから。あの言葉は俺の体験じゃない」

「違う」

考えるよりも先に言葉が放たれていた。

「誰のものとかならないんだよ」

最期の言葉は私へ向けたものだった。その事実への執着心から、私は余計な感情を生んでしまっていた。自分は特別だったんだという自惚れと、妙な独占欲。そんなものに囚われて私は、あの言葉を聞くことができたのは銀二くん達のお陰だということをすっかりと忘れてしまっていた。

それを思い出させてくれたのは、紛れもない彼の書いた本だった。

「あの言葉は私のものじゃなくて、こう、みんなのものっていうか。そう思えたのは銀二くんの本のおかげっていうか……」

上手く言葉が紡げない。後頭部を掻きながら時間が経つのを待った。

「……本当は、ずるいなって自分でも思ってた」

独り言のように淡々と、しかし勢いよく湧き上がる何かを抑えるように銀二くんは言った。

「でも」

こちらに向き直り、彼は私の瞳を力強く見つめて口を開いた。

「羨ましかったんだ」

ラムネの中のビー玉のように澄んだ、よく通る声がか心を驚掴む。

「あの言葉が俺に向けてじゃなくて、りいだったことが羨ましくてたまらなかった」

唇を噛み締め、彼は俯く。

胸のあたりにかかっていた薄暗い霧が晴れていく。あの言葉の所有権はきつと、誰のものとかそういうレベルの話ではない。ハンバーグ爆弾のようにみんなですべてを囲んで共有するものなんだ。大人になってからふと思いついて、酒でも飲みながら思いついた話に花を咲かせるような言葉なんだ。そうだ、それでいい。

「晩御飯、ハンバーグ爆弾だよ」

「そっか。俺あれ大好き」

「私も」

手持ち花火の軽やかな噴射の音が耳を掠めていく。線香花火のような儚い夏の夜が、こんなにも心地よいのはいつ以来だろう。私は微笑みながら、火薬の匂いが夜色の空気に溶けていくのを感じた。鼻の奥を軽く突いたそれは、私の心の爆弾が花火になって咲いたときの残り香だった。

優秀賞

青を焚く

福岡県立福岡講倫館高等学校 三年

紀川 晴好

手の平が大分熱くなってきたので、裏返して甲を暖め始めた。

私の前には焚き火があった。オレンジ色の陥がめらめらと揺らめいていた。そのさらに向こうには真っ黒な砂浜と海が広がっていた。

私の後ろには松の雑木林が広がっていた。やはり真っ暗で、不気味だった。

私の頭上には夜が広がっていた。今日は月が無かったが星は綺麗だった。

そして隣には父が——朝五時に私を叩き起こし、目の前の火を起こした父が座っていた。その隣には大きなゴミ袋が2つ置いてあって、父はその片方から一枚の紙を引き抜き、ねじって棒状にした後焚き火にくべた。

三月の早朝の海岸はとても静かだった。波の音と、背後の木々のざわめきしか聞こえない。今は火があるが、とても寒かった。

手の甲が熱くなったので、私はまた手の平を返した。父は紙の薪をもう一本加えた。

「燃やすか」父の提案に私は少なからず驚いた。卒業式を終えて大学生になるまでの春休みの第一日目の夕食の席で、私の「三年分の教科書と

が残ってるんだけど、どうすればいいと思う？」という何気ない質問に対しての返答だった。

「燃やすって……どこで？」

「海だよ」

聞けば、父は大学生の頃、よくその海岸で焚き火をしていたのだそうだ。初耳だった。

私は少し迷ったが結局父の案を採用した。まだ体験したことのない焚き火という行為に興味があったのだ。

だが、まさか朝四時に出発とは思ってもよらなかった。

突然起こされてもうろうとして私を尻目に父は私の教科書やらノートやらプリントやらをゴミ袋に詰め込み、車のトランクに押し込んだしまった。

私は文句を言ったが、父曰く「焚き火は暗い時にするに限る」とのことだった。

「火が燃えるために必要なものは何だか分かるか？」突然父が口を開いた。

「え……薪？」と私は答えた。

「そう。薪も重要だ。次々薪を足さないとすぐに火は消えてしまう。だけれどもっと重要なのは酸素。空気だ。空気の通り道を作ってやるのが何より大事だ。要するに『かまど』を作るんだよ」

はあ、と私は言った。この焚き火を構成しているのは私が海岸で拾った十数本の流木と父が後ろの雑木林で拾った太くて大きな松の枝だった。流木は松に立てかけられるように並べられ、それが屋根になって下に空間ができていた。父と私はそこに、プリントや破ったノートや教科書を放り込んでいった。

「松ってのは焚き火に向いてるんだ。『たいまつ』も漢字だと、松の明

かり」って書くぐらいだしね」と父は言った。

私はまたはあ、と相づちを打った。そして今日の父はよく喋るな。と、不思議に思った。父は普段口数の多い人ではなかったからだ。これも火の魔力なのだろうか。

私がそんなことを考えてると父が突然立ち上がった。

「よし。このままだと枝が足りないから拾ってくるよ、焚き火は任せた。紙を足す時はねじるか丸めるかして入れろよ？ そのまま置いたら風で飛んでいくことがあるから」

分かってるよ。と答えると、父は暗い砂浜に消えて行った。

私はゴミ袋からまた一枚紙を引き抜いた。家庭科のプリントだった。ねじって棒状にし、その先端を炎に近づけてみた。

移った火は紙を黒く焦がし、侵食し始めた。私は素早く『かまど』の中に突っこんだ。あつという間に薪は真っ白い灰となった。

私は続けざまに世界史、化学、物理、倫理の教科書、ノート、プリントを次々破って薪に変え、くべていった。どれも例外なく灰になり、煙になり、また炎の一部となった。やがて潮が満ちれば、すべては海に還る。こういうことを「諸行無常」と言うんだっけか。確かめようにも古典の教科書はもう焼いてしまった。

額に流れた汗で、自分の体温が上がっていることに気づき、私は着ていたコートを脱いで、その下のセーターの袖をまくった。

「大分育ったな」振り返ると父が帰って来ていた。両手にはたくさん流木を抱えていた。育った。とは焚き火のことだろう。確かに最初と比べてかなり大きくなった。

「もうそこまで大きくなればちよつとの事じゃ消えない。そろそろあれ燃やすか」

父に言われて、私はもう片方のゴミ袋から一着の服を取り出した。

それは。私が通っていた高校の制服。三年間共に過ごしたブレザーだった。

た。

「どう置いたらいい？」私は父に尋ねる。

「そのまま被せるように置いたらいいよ」

父の言う様に、火全体を覆うようにブレザーを被せると、一瞬火は消えてしまったように見えたが、すぐに虫喰いのような穴をあちこちに開け始め、広がっていった。

「石油で出来てるからな。良く燃えるぞ」

父が言った。私は炎を抱えて溶けてゆくブレザーを見ながら、高校三年間のことを思い出していた。

私は美術部に所属していた。幼い頃から絵を描くのが好きだった。

そこそこの規模の大会で、そこそこ大きな賞をもらったこともあった。大きな絵を、部員全員で協力して制作したこともある。私の美術部員としての高校生活は、まあ充実したものだった。

私は絵を描いてる最中よりも、描く前にどんな絵にしようか構想を練ってる時や描き上げた作品を皆に見せて、感想をもらう時の方が好きだった。顧問の先生や部員の皆、絵について造詣の深い父は忌憚なく意見を述べてくれた。一通り全員に見せたあと、私はいつも作品がある場所へ運んだ。

母のいる病院だ。

白いベッドに横たわる母は、私の絵を手にとってしばらく眺めた後、決まってこう言った。

「すごいねえ。私にはとても描けないから尊敬しちゃうよ」

それがお世辞でないことは分かっていたし、母は絵について詳しくなかったので単純な言葉になってしまうのも当然だったが、私には張り合いがなかった。

でも私は新しい絵が描ける度に母の病室に運んだ。母は気に入った絵

を壁にかけてくれたので、母の病室はいつしかちょっとした画廊ギャラリーのようになった。

母が、亡くなるまでは。

それはちょうど2回目の夏休みに入る直前のことで、私は大会用の絵を描いている途中だった。

始めに言っておくと、私も父も泣いたりしなかった。何故なら母の余命が残り僅かなことは本人を含めて皆把握しており、覚悟はできていた。そして、母は誰かの気が沈んでいることが、何よりも嫌いだった。

だから悲しいのは当然だが、いつまでも悲しみに沈んでいたら、母を心配させてしまう。そう思ったのだった。

ところが、母の葬式が終わって部活に復帰した私に、ある変化が生じた。

絵が、まったく描けなくなってしまったのだ。

私は読んだ本や聴いた音楽から着想を得ることが、多かった。だから本、音楽、映画、他の人の絵、それこそ焚き火に薪を足すように次々吸収したが、私の頭には何のイメージもわかず、手は何も生み出さなかった。

そうしてついに、夏休みが終わる頃に私は美術部を退部した。以来一枚も絵を描いていない。

私は母のために絵を描いてるつもりは無かった。しかし、母の言葉、存在そのものは、私が絵を描く上で最も重要な「空気」だった。空気が消えてしまつては、火が点くはずも無かったのだ。

シャツ、スカート、ネクタイをすべて焼き尽くし、ついにゴミ袋には一枚の紙を残すのみとなった。

母が死んだ時に描いていた、私の絵だ。

当然未完成だった。これからも、二度と完成することはない。私は深

呼吸して、ゆっくりと、紙を、火の上に、乗せた。

火が紙を包みこむ、その瞬間。ひゅつと風が吹き抜けて、私の絵は宙に舞い上がった。

「紙はそのまま置くなって言つたら……ところであれ燃やしても良かったのか？」

私は父の言葉に答えることが出来なかった。目の前の光景があまりに美しく、絶句していたのだ。

いつの間にか夜は明け始めていた。空は濃い青で、水平線に近付くにつれ薄くなつていった。その青の中を鮮やかなオレンジが唯一ただつ、くるくると落ちていた。

私の絵はそのまま海に落ちて、炎は消えた。

今まで見た中で最も鮮やかな青だ。その中を横切った炎は何より美しかった。

ボツという音が、私の中で確かに聞こえた。私は何だかいても立ってもいられなくなった。そうだ、描こう。久し振りにそう思った。

「焚き火って楽しいね」私は言う。

その言葉に父は少し驚いたようだが、やがてとても嬉しそうに「だろ？」と言った。

ああ、早く。早く絵を描きたい。母は何と言うだろうか。

燃え盛った炎は、もはや消えそうに無かった。

優秀賞

春の七草

山口県立徳山高等学校 三年

芳岡 未那

桜が満開となったある日、一人の女子生徒が廊下を歩いていた。彼女の名は、芹なずな。偽名ではない。芹なずな、本名である。

「やーい、せりなずなー」

「ごきよう、はこべら、ほとけのざ、すずな、すずしろ」

「春の七草と同じクラスなんてさあー」

「ちよーウケるー！ー」

キャハハハッと声高に、派手な女子生徒が通り過ぎていった。芹なずなはその背中に向かって、金切り声で叫んだ。

「バーカ！ 死ね！ 消えろ！」

「キャハハハッ、草の分際で激おこじゃーん」

派手ガールズはろくに相手をせず、笑って去って行った。

この名前のせいで、芹なずなは生まれてからの十七年、誹謗中傷とは切っても切れない関係だ。なぜ、親は『なずな』という名前にしたのか。親に名前の由来を尋ねてみる気にもなれない。

「文芸部に入りませんか」

桜が散り始めた頃。最近やたらと勧誘してくる人間がいた。その名も、赤川太郎。これまた何という名を親はつけたのだろうか。彼の弟の名は

きつと……。

いや、そんな話はここで不必要だ。今この話を読んでいる君たちに必要なのは、赤川太郎の情報だろう。彼は名前のとおり、文芸部に所属している。しかし、小説を書くのは面倒らしく、俳句を詠んでいるらしい。らしい、というのも、確証がないからである。彼が表彰のために壇上に上がっている姿は、一度も見たことがないのだ。

「入部しませんか」

「やだ」

「暇でしょう」

「うるさい」

「絶対楽しいですよ」

「死ね」

「とりあえずどうですか」

「消えろ」

「……ピエロ？」

「消えろつつてんだろ、バカ！」

芹なずなは教室を出た。女子生徒たちの笑い声、赤川太郎の視線が追いかけてきた。

次の授業、サボろ。

若葉がすっかり生え揃ったある日。教室の机に、見慣れないものがあつた。落書きはもう見慣れている。今日は落書きの代わりに一冊の分厚い辞書が置いてあつた。

新しい中傷法だ……。私が頭が悪いのを強調するためか。

しかし、よく見ると辞書ではなかった。『歳時記』と書いてある。適当なページをめくってみる。

【若葉】 山若葉・谷若葉・里若葉・樟若葉・椎若葉・柿若葉・樅若葉

葉・蔦若葉・若葉時・若葉風・若葉雨

初夏の季語。木々の芽は、春に出てきて、初夏のころになるとみずみずしい薄緑色の葉に生長する。その若々しい美しさから、和歌・俳諧では「若葉」と呼ばれ、多くの作品に詠まれている。

そのあたりにうじゃうじゃ生えている木にそんな意味があったのか、と少し驚いた。朝日に照らされた若葉を見た。いつもより生命力を感じたのは、気のせいだったのだろうか。

「あ、それ僕の歳時記です。間違えて芹さんの机に置いていましたか」

何をどうしたら間違えるのだろうか。彼女の机は現在窓側の列の最後尾。彼の机は廊下側の列の最前席である。

「歳時記っていうのは、俳句で使う季語の説明書みたいなものですよ。その季語の季節はいつなのか、どのような句が例としてあるのか分かるんです。おもしろいでしょう」

「全然」

「あ、ここでの『おもしろい』は『いとをかし』の方ですよ」

「知らん」

「なるほどなるほど」

知らない、と言った後に、なるほど、と言う人なんて他にいるのだろうか。芹なずなは呆れて教室を出た。特に行くところもないが。

「はい、そのまま前にお進みください」

聞き飽きた声が背後から聞こえた。鳥肌が一齐に立った。そして言われるがままに、足が勝手に動いた。不意の出来事だったので、反抗心も縮こまってしまったようだ。

「階段を下りてください。三階まで。……はい、では左向け左をして、前進」

後ろでピッピ、ピッピと笛を吹く真似をしている赤川太郎。もういい。このままこいつのノリに付き合っただけよう。後ろにいるから監視されている感じで、逃げるのが面倒になった。それにしても、私をどこへ連れていくつもりなのか。

「全体、止まれ。左向け左」

目に飛び込んできたのは、漢字三文字。

「……文芸部」

「そうですね。さ、どうぞ。鍵はかけていないので」

「帰る」

「そんなこと言わないでくださいよ。いつも保健室で欠課するのも、退屈でしょう。たまには部室でもどうですか」

「……勝手に入ったらヤバイでしょ」

「ああ、その点ご安心を」

赤川太郎は、重たそうなドアを開けた。

一時間目はLHRのはずだった。しかし今、俳句の授業を受けている。生徒は芹なずな、先生は赤川太郎。普段は真面目な彼が欠課した訳は、授業内容が嫌だからという、単純かつ正当な理由があった。

「僕みたいな人間が意見したところで、結局は聞いてもらえないのがオチですから。だから、文化祭の話し合いは嫌なんです」

芹なずなは欠伸を一つした。この俳句の授業っていうのも、中々つまらないよ。寝ちゃおうかな。

「はい、ではその歳時記で『春の七草』を調べてみましょう」

実践式の授業か。こりゃあ、眠れそうにないな。

【春の七草】

新年の季語。一月七日の七草粥に入れる若菜を「春の七草」と呼ぶ。もともと七草の種類については、時代によっても地方によってもすこし相違がある。一般的には、芹・薺・御形・繁縷・仏の座・菰・蘿蔔の七種とされる。かつては、むしろ七草をそろえるのが大変であつたらしく、近世の都市生活者たちは、必ずしも七種類でなくても「七草粥」といつていたようである。

「どうです？ 悪い意味なんてないでしょう」

芹なずなは顔を上げた。赤川太郎は、ゆっくり語りかけるように言った。

「確かに『芹なずな』なんて名前は、周囲の人から見れば驚きですが。でも、よく考えてみてください。七草粥を食べるのは、一年の無病災息を願うためなんですよ。

あなたのご両親も、そういった願いを込めたのではないのでしょうか」

「……そうだとすると、ださい」

「あはは、それを言われたら僕も終わりですよ」

お互いの顔を見合わせ、吹き出した。

「せりなずな」

「ごきよう、はこべら、ほとけのぎ、すずな、すずしろ」

芹なずなは、背後から聞こえたその声にぴたりと足を止めた。そして言った。

「『春の七草』の季節を述べよ！」

派手ガールズは思ってもみなかった反撃に、たじろいだ。

「えっ……そりや、春でしょ」

「あつはははははは！」

芹なずなが吹き出した。進級した頃の、憎しみのこもった目をした彼女は、どこにもいなかった。

「えっ、ちよっ、なにこいつヤバイヤバイヤバイ」

「マジヤバいつて、ちよっと」

二人はそそくさと去っていった。

「赤川、撃退したよ」

「おめでとうございます」

「あいつら最後、『ヤバイ』しか言っていなかったよ。最近の若者っていうのは、すごく言葉が貧乏だなーって思ってた、笑えた」

「あなたも以前は同じようなものでしたよ」

「まあ、そうだけど。でもさ、あたしは文芸部に入ってから変わったよ」

「そりやあよかったです」

ふたりは笑いながら、夏の光のあふれる階段を下りて行った。

佳作

感情エネルギーの法則

横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校 二年

長谷川 佐和

「ねえ、いつも思ってたけど、それ何？」

カナは、ヒデのポケットから出てきた、白くて小さな三日月形の物体を指さして言った。

「え……知らないの」

カナは眉間にしわを寄せ、不機嫌な顔を隠さなかった。

「テレビで見たことない？」

「あんま見ないし、テレビ」

で、なんなの、とカナはもう一度指を指した。

ヒデのポケットから出てきた、白くて小さな三日月形の物体。これは感情エネルギー電池、通称「カンチ」というものだ。

「感情エネルギー」という新しいエネルギーの形が発見されたのは、ヒデが小学生のときだった。エネルギーといっても、それは物を移動させたり電力を生み出したりする力学的なエネルギーの一つではない。感情エネルギーとは、「思考・感情・願望を、実際の行動に移す原動力」、つまり、「感情の振れ幅」のことである。

この革新的なエネルギーの発見から間もなく、ある研究者が、それを人間の外部に取り出すことに成功した。「カンチ」とは、その名のとおり、

感情エネルギーを人間から取り出して蓄えたり、人間に供給したりできる電池のようなものだ。

カンチはすぐに精神医療に応用された。カンチによって感情エネルギーが体外へ取り出されると、心の動揺は抑制され、逆に感情エネルギーを与えることで、無気力な人を活動的にすることができたからだ。

ヒデは中学二年生のとき、病院の先生から初めてカンチをもらった。ヒデは幼いころからなにかと悩みやすい性格で、感受性の強いヒデにとって、カンチはなくてはならないものだった。心にモヤモヤがあると、近所の公園にある池のほとりで日が暮れるまでぼうつとするのがヒデの習慣だった。カンチを持つようになってからは、ぼうつとする代わりにカンチで心を落ち着けた。

ヒデとカナがいたのはその池のほとりだった。

「カンチを使うって、どんな感じなの？」

ヒデがスマートフォンでカンチを検索して見せると、カナは興味津々に聞いた。

「カンチは、左の耳の後ろに付けるんだけど——」

ヒデは思い出すように目をつぶった。

「付けてから少しして、呼吸が深く、楽になるんだ。空気の通り道が開いた感じかな。筋肉もちよつとずつほぐれてきて、あと、視界が冴える感じもあるかな」

視線を感じて恥ずかしくなったヒデは、目を開けた。

「えっと、これは僕が沈んでいるときの話だから、興奮しているときに使ったら、また全然違うと思うけど」

ふーん、と言い、カナはヒデの顔を覗き込んだ。

「じゃあ今、沈んでるんだ？」

ヒデはどう答えていいのか迷った。

「うん、まあ、うん……」

「いつもと同じに見えるけど」

カナは笑ったが、それは当たり前だった。ヒデがここに来るのは、気持ちが悪く沈んでいるときであり、カナはこの池のほとりでしかヒデに会ったことがない。カナは沈んでいるヒデしか見たことがないということだ。

ひよい、と、カナはヒデの手からカンチをとった。

「これ使ってみてもいい？」

カナはカンチについて、本当に何も知らないようだった。

「いや、使えないよ」

「どうして？」

「カンチはその人専用なんだ。他の人が使ったらどうなるかわからないから、自分以外使えないように安全装置がついているんだ。だから付けてみたって使えないよ。」

そもそも、そのカンチには僕のネガティブな感情がいっぱい入っているし、使ってもいいことないよ」

なんだ、と言って、カナは立ち上がった。

ヒデとカナが出会ったのは三か月前の、六月のことだった。長く続いた雨がやっと晴れに変わったところ、カナはヒデの前に突然姿を現した。

「私、加奈。名前聞いていい？」

カナがヒデの手を強引に握ったその日から、ヒデが池にいると、必ずカナが来るようになった。

カナはヒデにとにかく興味があるようだった。ヒデは最初、何を話せばいいのかかわからないと思ったが、カナがヒデを質問攻めにするので、会話に困ることはなかった。

将来の夢は？ 大学決めた？ 何か習い事してる？ 芸能人なら誰が

好き？ —— 質問は何の脈絡もないものばかりだったが、カナは強気な

見た目と裏腹に話をよく聞くので、ヒデも次第に心を開くようになった。

会話に少しの沈黙がうまれたとき、ヒデはそこへ来た本来の目的を果たそうとした。ヒデがポケットからカンチを取り出し装着する一連の流れを、カナはじっと見ていた。

ヒデはいつもの場所に座り、カナもいつものようにそこへ来た。カナは、ヒデがボールを持っているのに気付いた。空気の入りきらないプラスチックのボールは池に入ったのか、少し濡れて汚れていた。

ヒデはボールを持ったまま、池の対岸で遊ぶ小学生くらいの男の子たちを見ていた。その中で、少し痩せて背の高い男の子が、輪から外れていた。

「どうしたの？」

「あ、このボール……」

赤いボールを持ったまま、ヒデはうつむき黙り込んだ。

「あの子たちの？」

ヒデはたぶん、と頷いた。どうすべきか悩んでいるようだった。カナもヒデも何も言わず、ボールを抱えてしばらく突っ立っていた。

すると、男の子たちがこちらを向いた。ヒデの持っているボールに気づいたようだ。何か言って笑っているが、ヒデとカナには大きな笑い声以外はつきり聞こえなかった。そのうち、赤いTシャツの男の子が輪から外れた男の子に向かい合った。

「『取り戻してきて』かな」

カナには同じくらい小さな弟がいたので、このくらいの男の子たちの考えそうなのがわかった。

池の左側から、男の子がとほととこちらに歩いてきた。その悲しげな足取りを突っ立って見ているうちに、他の男の子たちと近くに止めら

れていた自転車はどこかへ消えていた。

そばへ来た男の子が口を開く前に、カナは言った。

「このボール、へによへによ」

カナは男の子へボールをパスし、バレーボールできるかと聞いた。男の子は黙ってカナにボールをパスした。

はじめ男の子は何もしゃべらなかつたが、カナが一人で盛り上がっているうちに、男の子にも笑みが見えるようになってきた。

「ヒデ、審判やって」

なんの審判かはわからないが、ヒデは審判を任された。

「あっ」

練習とも、試合ともわからないパスを繰り返すうちに、男の子のパスしたボールが池へ落ちてしまった。

ヒデはそのボールを走って取りに行った。ボールは池の岸から少し離れた場所に浮いており、ヒデは膝までザブザブと浸かって何回かボールをつるんと滑らせながら、腕に抱えることに成功した。そのとき、近くのマンションの、夕方五時のチャイムが鳴った。ヒデの顔には苦笑いが浮かんだ。カナも男の子も同時に笑った。

ヒデはハンカチでボールを拭いて、男の子に渡した。男の子はありがとう、と言って、帰っていった。

ヒデは池のほとりに座り、びしょびしょに濡れたズボンの裾を絞った。そして、はっと思い出したように、ズボンのポケットに入れていたカンチを確認した。カンチの無事を確認すると、「よかつた」という小さいつぶやきがヒデの口からこぼれた。そんなようすを見て、カナは少し寂しそうな顔をした。

「ヒデはどうしたら幸せになれるの？」

質問は唐突だった。え、とか、は、とか言いながら、ヒデは困った。質問から回答までには、だいぶ時間があつた。

迷った挙句、ヒデは言った。

「幸せじゃ、ないことはないよ」

「幸せって言うてくれないと帰れない」

カナのようすがおかしいと思い、ヒデは、「どうしたの？」と聞いてしまった。はあ、というため息とともに、カナは呆れたようすでヒデの隣に腰を下ろした。

「ねえ、カンチ知らない人なんて、本当にいると思う？」

どうやら、カナがカンチを知らないというのは嘘だったようだ。しかし。急なカンチの話は、ヒデをますます混乱させた。

私ね、とカナは語り口調で話し始めた。

「ゴールデンウィークに、治験のバイトしたの」

「治験」とは、開発された薬の作用や副作用などを調べるために、実際の人に対して使用検査をすることだ。アルバイトが募集されることもある。

「最近って、カンチ関連の治験多いのよ。新しい機能とか、安全装置の機械とか、色々開発されてるから」

いつものカナのような、流れるような口ぶりだったが、ヒデにはその話がどこへ行くのかわからなかった。

「私がやった検査ね。『他人の感情が入ったカンチを使ったらどうなるか』ってやつだったの。」

他人と同じ気持ちになるって想像できる？ 私はその人がどういう人で、何が原因でそんなに悲しいんだかわからないけど、なんだかすごく、胸がどきどきそわそわして、不安で、やるせない、そんな感じがした。

すつごく不幸な人には同情するし、なんとかしてあげたいと思うでしょ？ それはたぶん、その人の気持ちを追体験するからだよね。それと同じで、なんとかしてあげないとして、本当に耐えられなくなったの。だって自分のことのように悲しいんだもん。自分の悲しみを解消するために人間は自然に動くでしょ」

カナの言う「その人」とはヒデのことだった。カナはヒデの本物の感情を自分のものとして共有したという。ヒデは頭では理解できたが、感覚としてはよくわからなかった。

「治験の守秘義務、やぶっちゃった。内緒ね」

えいつ、と言って、カナは突然ヒデの手首をチョップした。カンチは力の抜けたヒデの手から簡単に落ちていった。

ヒデはとっさのことで何も言えなかった。カナは目が合うと、にやりと笑った。

池は中心に向かって坂になっていた。坂を下り始めたカンチを、ヒデは慌てて拾おうとしたが、カナの手がそれより先にカンチをつまんだ。

そして流れるような動作で、カナはカンチを池へ投げた。

トプン、という音とともに、池の水が跳ね上がる。

「ちよっと、なんで……」

「あんなのないほうがいいわよ」

そうしてカナはガシガシと坂を上っていく。ヒデはどうしようもなく後を追った。

急に振り返ったカナに、ヒデはまた驚いた。

「やっぱり感情エネルギーっていうのは空気を介して、半分半分、分け合うものよね」

佳作

椿葉うさぎ

千葉・国府台女子学院高等部 二年

佐藤 朱里

昨日の積雪は大層ひどいものだった。目を覚まして二重ガラスの窓を覗くと、外は蒼天と銀世界が稜線を境にはっきりと隔てられている。盆地にある私たちの集落は、雪化粧を施した山々によって、完全に包囲されていた。

両親は雪かきに追われ、私はというとそれに巻きこまれて重労働を強いられた。妹も一緒かと思いきや、大雪に犬の如く喜び庭を駆け回った挙句、今朝は三十八度五分を叩き出してベッドでうなっている。

「疲れた……」

スキーウェアを脱ぎ捨てて、家の裏に座りこむ。背中が汗でぐっしょりしていて気持ちが悪い。そのくせ、手袋をしていても指先がジンとして痛い。恐らく、赤くなっている。

「お疲れ様」

両親の死角で、密かにしばしの休息である。投げかけられた労いが身に染みる。唐突な豪雪は人々の余裕を奪うものだ。両親は終始無言で埋もれた車を掘り起こしている。

「そっちこそ。家のお手伝い、大変だよな」

そこで、ふと気が付いた。周囲を見回すが、家の裏には人影は皆無。

私がたった今、会話をしたのは誰だったのか。

「ここだよ、ここ。全く、人間の目は節穴なのかい」

少年らしき変声期前の声は、私の足元から聞こえてきているようだ。何がなんだかよく分からないままに視線を落とすと、そこにはもつくりとした白い塊が一つ。二つずつの椿の葉と南天の実、お隣の佐藤さんの庭から拝借したもののだろう。

「えっと、どちら様ですか」

朝からの雪かきですっかり疲労の溜まった私の頭は働いておらず、分かったことを尋ねていた。向こうも赤い南天の目を細め、「分かったことを訊くんだね君は」

と、呆れ顔をされた。

「じゃあ自己紹介をしてあげよう。見ての通り、僕の名前は雪うさぎさ」
そうだ。椿の耳と南天の目は、雪うさぎの典型的パターンだ。ただ一つ疑問なのは、声帯も大脳も有さない雪の塊が、ヒトの言語を話している点であるのだが。

その雪うさぎの話によれば、彼——自ら男性であると主張した——は、昨日我が妹が製作した作品の一つであるらしい。雪が喋るとは、私は相当疲れているようだ、その夜はたっぷり休養をとったのだが、翌日に家の裏に来てみても、やはり雪うさぎは喋った。昨夜降った雪に埋もれて、「誰か、雪を退かしてくれないか」と情けなくぐもった声で助けを乞うていた。

奇妙なものだと訝しんでいたのだが、この雪うさぎ、話してみると結構面白い。というのも、かなりの博識なのだ。古代人の灌漑技術や、黒船に乗っていたペリーの人のなりについてなど、興味深いがどうでもいいことを饒舌に話す。

「なんでうさぎは何でも知ってるの」

純粹な疑問をぶつけると、

「僕は全部、この目で見てきたからさ」

なんて、ませた冗談で返す雪うさぎ。生意気な奴だ。その時点での彼の年齢は、妹に作られてからの、たったの一週間と三日だけである。

そんな雪うさぎは、器用な妹のお陰か、最初こそ楕円体を半分にしたような、なめらかなボディをしていたのだが、除々にゴツゴツと歪になってきていた。雪が固まってきたせいだろう。絵本の雪だるまのように、いつまでもふわふわではられないのだ。

「あんたもくたびれてきたね」

にやけながら茶化すと、慥然とした彼は、

「そりゃあ、雪だから。君と違ってね」

「……え？」

そこで私は、思いがけず呆然とさせられてしまった。

「うさぎ。……あんた、声変わりしてる？」

緩やかな変化で気が付かなかったが、その声音は確かに成長していた。私の問いに、彼はなんでもないことのように頷く。

「当然だろう。生きとし生けるもの、皆老いるんだよ」

そんなことは知っている。ただそれが「喋る雪うさぎ」にも適応される法則だったとは知らなかったただけだ。

「じゃあ、うさぎも死ぬの？」

「死ぬさ」

「いつ死ぬの」

「今年の雪が解ける頃」

私は何も言えず閉口した。今朝、母から今年の雪は早く終わると聞いたばかりだった。

じつと雪うさぎの赤い目を見つめる。悲嘆も畏怖も読み取れない。南天の目は、もう色あせてきている。

「死ぬのって、怖い？」

私が数十年先まで経験しないであろうことを、この小さな白いうさぎ

はあと少しで迎えるのだ。全身がざわつく。マフラーも手袋もしている筈なのに。

雪うさぎはしばらく黙っていたが、やがて合点がいったふうに否定した。

「いいや。でも、君は恐れているようだね。だから見せてあげよう」

何を、と私が尋ねる前に、彼は言った。

「僕の人生をね！」

——その瞬間、私は雪になっていた。

春になると、私は解けた。でも痛くもなんともない。ただ形が変わっただけだから。

水になった私は、どんな場所にも行ける。川を流れ、魚たちと泳ぎながら海を目指すことができる。地中に染みこむ湧き水となって眠ることもできる。千年、二千年もの長い間、暗い大地の底で。

でも、冒険心が擽られた私は、海を泳ぐことにした。

地球を覆う海は何処までも果てしなく広い。私は国境を飛び越えて、あちこちを旅した。途中で深海に潜って、ばったり出会ったリユウグウノツカイにご挨拶。ダイオウイカの大きな触手とハイタッチ。ライトで海中を探索中の潜水艇を横目に、そろそろ太陽が恋しくて、海面を目指した。

北極の氷山の中に何万年も閉じこもるニート生活も捨て難いけれど、私は太陽に焼かれて水蒸気になることを選んだ。きつと、空を泳ぐのも爽快だろうから。

空中を昇って昇って、渡り鳥とたわむれながらまた昇って、辿り着いた雲の上。丁度、その時はとても寒かったようで、私は雨ではなく雪になった。雪になって、ふわりふわりと下界へ舞い降りていく。

ねえ、うさぎ。見てよ、あれって私の家の庭じゃない？

雪の私が降り積もったところを、見覚えのある顔が覗きこんでいた。

「犬は喜び庭かけまわり、猫はこたつで丸くなる！」

陽気に歌いながら私を掬い取ったのは、間違えるわけがない、我が妹だ。

そこでやっと理解した。これは、雪うさぎの記憶の疑似体験なのだと。妹に雪うさぎとして形作られていたところで、急速に現実に取り戻された。目の前にはちよこんと佇む澄まし顔の雪うさぎ。

「やあ、お帰り」

まるで壮大な映画の余韻に浸っているような心地で、「ただいま」と呟いた。

気が遠くなるくらい長い旅路を辿っていた気がする。不思議と、先程まで感じていた、死に対する漠然とした恐怖は、綺麗に消え去っていた。つまり、そういうことなのだ。うさぎはいなくなるが、うさぎだったものは世界中を巡って、またいつかうさぎになったり、雪だるまになったりする。怖いどころか、次に自分が何処へ行くのか楽しみですらある。水の大循環とは、そういうものなのだ。そしてそれはきっと、水に限ったことではなくて、私たち人間も同じ。

「うさぎ」

「何だい」

小さなその体を両手で包みこんで、精一杯の歓迎の意を込めて、微笑んだ。

「遠いところをようこそ、うさぎ！」

溶けるから降ろせと文句をつけた雪うさぎから、それ以上の返事はなかったのだが、その白い顔に微笑を見た気がした。

それからというものの、雪うさぎの声は瞬く間にしゃがれていった。私はとりあえず、凍った彼が地面に縫いつけられないよう、皿の上に乘せてやって、老いていく彼を見守った。

「最近、暖かくなってきたね。あんたも随分小さくなってきた」

「君の方は全く変化がないね」

「当然でしょ。私は一冬で解けたりしないし」

「そうだね。僕よりずっと、長生きだ」

それが、私と雪うさぎの最後の会話。

翌日。まだ解けきらない残雪がちらほらと見える家の裏。私が用意した皿の中には、もう枯れ果てて色を失った椿の葉と南天の実、それから雪解け水が少し。

朝日に反射して微かに光る水。彼は無事、次の旅に立ったらしい。

人間は、雪うさぎよりかは幾分、長寿かもしれない。でも、何万何億と続く彼の旅路に比べたら、私たちの命なんてほんの一瞬だと思う。

彼が次の旅で手始めに何処へ行こうとしていたかは知らないが、出発前に少々、寄り道をしてもらおう。

皿の水面には、企んだ顔の私が映っている。

ためらうことなく、私はその水を一気に煽った。

後に残るのは濡れた南天の実、そして椿葉。

またね、水うさぎ。

佳作

実り

千葉県立東葛飾高等学校 二年

生天目 咲樹

都会より小さい電車からの風景は、都会より広々としている。風が吹くたび稲が波立ち海のような。あのモンシロチョウはハマグリ、カカシは人間、ああ空が青い。このまま泳いで行って、智子たちのいる本物の海に行きたいような気がする。でも、ばあちゃんが待つてる。

ふと、ポッケを探る。二年前まで通っていた中学校のダサイジャージの大きいポッケには、小銭入れと、端っこが折れた葉書が入っている。「百合子へ あけましておめでとう 今年の夏もばあちゃんはトウモロコシを沢山作って待っています ばあちゃんより」

墨で書かれた綺麗な文字。そしてトウモロコシの水彩画。粒の一つひとつが艶々と描かれ、生き生きとしている。じいちゃんの絵とはまるで対照的だ。なんせじいちゃんの絵は戦争で死んだ人ばかりをモチーフにしていたのだ。この惨事は忘れてはいけないことだから、と。それはまるで自分が死んだときに、自分が忘れ去られるのを恐れているようだ。もし私なら、生きている人には死んだ自分なんか忘れて明るく生きてほしいと願うだろうけど、それは、人に囲まれて生きる人の贅沢な考えなのだろうか。

『次は、●●駅、●●駅——』

「百合子ちゃん！よく来たわね」

久しぶりの孫との再会は嬉しかろう、さぞ嬉しかろう。仏壇の前へ行きじいちゃんの遺影に手を合わせる。

「ほら、百合子ちゃんの大好きなトウモロコシ。家に持って帰り」

そう言って私に大きな袋を渡した。ありがとう、とだけいって鞆にしまった。

「百合子ちゃん、料理手伝ってもらえる？」

「いいよ。」

「そうだわ百合子ちゃん、学校はどう？」

「楽しいよ。」

「仲良しのお友達はできた？」

「本当は今日遊びに行く予定だった。」

「もう帰っちゃうの？」

「来年もきつと来ますって。」

「百合子ちゃんが毎年来てくれるおかげでこうして生き延びているのよ」

「そう言われると来ないわけにはいきませんね。」

「ばあちゃんの生きがいなのよ」

「良かったです。」

「百合子ちゃんがいてくれてよかった」

綾香ちゃんは？

私はばあちゃんの名前を知らない。親族がいるのかもわからない。百合子がなぜ死んだのかもわからない。ただ、隣の畑の農家さんが、

「先月孫が亡くなったんよ。じいさんを亡くしてまだ半年も経ってないこんな時になあ」

と私に話してくれたことがある。娘か息子が家に訪問している気配は無

いから、たぶん一人ぼっちだ。

たまたま家出先でこんな風に出会ったばあちゃんと、四年間も関係が続くとは思っていなかった。でも私はこの関係に満足している。

サンタクロースの存在を信じる子供に真実を告げないことは「騙り」だろうか。そしてその仮想に付き合っただけプレゼントを渡し、喜ばせることは「裏切り」だろうか。私はそうは思わない。ばあちゃんは毎年靴下を空けて待っている。お手紙を書いて待っている。だから来年も私は、ばあちゃんが、美しく透き通った空想トウモロコシを入れた、空っぽの大きな袋に、仮想を沢山詰め込んで届けるだろう。

私はきつと、ばあちゃんが死んでも忘れない。生きるものにとって生きることの喜びとは、この世に自分のひっかき傷を残すことだろう。

ところで、私はどうなのか。この世界を全力で生きてどうにか功績を残すのも良いけれど、最近なぜだか、欲望と解消の繰り返しで空しい。死んだらやっとなら解放されるのだ。

それでも私は智子と海に行きたいし、ばあちゃんがああやって喜んでくれるのに喜んでいい。空は綺麗だし、緑の稲は秋になったら実を成して、私の一部となってくれるのだろう。そうやって当たり障りのない欲を思い浮かべてはどうしようもない哀愁を感じるときに一番、私は生きているのだなと思える。

ばあちゃんが死んだら、私の世界から「百合子」は消え去るだろう。でも綾香はまだまだ生きるつもりだ。少なくとも、死の恐怖を乗り越えたあとのトウモロコシを、生き生きと描けるようになるまでは。

ふと外の風景に目をやる。茜色の空、それに相変わらずの緑だ。葉と葉の間を翅打ち翅打ち、モンシロチョウは進む。そういえばハマグリは飛ばないのだった。

泳げない人

大阪府立岸和田高等学校 二年

中庭 里沙

小さい頃からプールの授業が嫌いだった。体の弱かった望は夏に数回ある授業のうちの半分も出席できず、中々泳ぎが上達しなかったのだ。特に息継ぎが苦手だった。息が続かなくなつて顔を上げるのに、吸い込んだ空気は何故か余計に息苦しさを増幅させ、耐えきれなくなつて足を着かなくてはならなかった。そうしてコースの途中で立ち止まったときには、もう既に他の同級生は端まで泳ぎ切りプールから上がるところだった。

「失礼します」

ドアを軽くノックして中に入る。高校生になつても体は弱く、保健室の常連になつていた。

「おはよう、山内さん」

低く落ち着いた声が返ってくる。養護教諭の暮林先生は男性だ。小中学校では女の先生だったし、女性のイメージが強かったので驚いたが先生の低い声には不思議と落ち着くものがあった。

「どうした？体調悪い感じかな？」

この先生は毎日のように保健室に来る望に毎回こうやって優しい声で聞いてくれる。その声が望はとても好きだった。大体の保健室の先生は

初めの方こそ丁寧に容態を訪ねてくるが、望が保健室に通いつめる体の弱い生徒だと分かるとそれも適当になる。黙って体温計だけ渡された事もあった。

「頭が痛いので少し寝かせてください」断つてベッドに入る。昨日よく眠れなかったせいaka体が重い。四時間目の苦手な数学には出たいので三時間目は一時間休むことにした。不眠症気味の望だが、この保健室ではよく眠ることができた。先生は植物みたいな人だと思う。二酸化炭素を吸つて酸素を放出しているに違いない。この保健室はとても息がしやすい。

横になるといくらか気分がましになった。硬いベッドにゴワゴワしたシート、消毒液のにおい、時々、先生が何やら作業する音。瞼を閉じると徐々に意識が遠くなつていく。

「失礼しまーす」

ガラガラと乱暴に開いたドアの音に一気に現実に戻された。

ノックもせずに誰かが入ってきたらしい。声は元氣そうだから怪我だろうか。

「おはよう、どうしたのかな？」先生は相変わらず優しい声で聞く。

「んー授業タルいからさばりに来たー」

なんだそれ。思わず声が出そうになった。サボりを公言して保健室に来る生徒など本当にいるのか。その男子生徒の声は先生のものとは違つてキンキンと頭に響いた。最悪だ。再来した頭痛に頭を押さえる。さらに悪いことに、その生徒はどうやらサボつて寝に来たわけではなく、サボるにあたつての話し相手が欲しかったらしい。先生にむかつて数Bの古屋の話し方が独特だの親が勉強しろとうるさいだのと無駄に大きな声で話しかけている。

「岡田君、体調不良で寝ている子がいるからもう少し静かにね？」先生が困った風にたしなめてから少しましになったが、ずっとこのキンキン

した声を聞かなくてはならなかった望は一時間一睡もできなかった。

結局、あまり体調は回復できなかった。先生にお礼を言ってふらつきながら教室に戻る。ドアを開けると一瞬、教室が静まりかえる。無数の視線が一気に刺さる。それは一瞬で、またすぐにそれぞれの雑談が再開され、何事もなかったかのように教室はざわめきを取り戻す。雑談をしながら、何事もないようにこちらを窺っている。

教室は水族館の水槽に似ている、と思う。大きな群れを成す魚、たった一匹で泳ぐ魚、そして、上手く泳げない魚。小さい魚は大きな魚に食われないように必死になりを潜めていなければならない。

いつだったか小学校の遠足で行った水族館を思い出す。最初に行ったブース。真ん中にあったイワシの水槽で群れに追いつけない一匹がいた。生まれつきなのか、右のひれが小さく、上手く泳げないようだった。ぐんぐん泳ぐ大量の群れに圧倒されて小さな一匹には誰も気が付かない。望は何かモヤモヤとしたものが胸に広がるのを感じた、自分に似ている気がした。そのモヤモヤは楽しみにしていたイルカショーを見ても消えてはくれずに帰りのバスまでずっと続いた。

あのイワシはまだあの水槽にいるのだろうか。席に着きながら考える。ずっと群れに追いつけずにそれでも置いて行かれないように必死で泳いでいるのだろうか。水槽の中だからはぐれることなんてないのに。いや、はぐれられないからかもしれない。

ひそひそと話す声が耳を伝う。望はそれが自分に向けられたものだとか知っている。知っていて、気づかないふりをする。気づかないふりをして黒板を睨む。侮蔑と好奇が混じったような視線が背中に刺さっている。水の中は、上手く息ができない。

視線は望が教室にいる間中ずっと刺さり続ける。

その日暮林先生は出張らしく不在で、保健室は開いていなかった。朝から体調が悪く、二時間目に立ち寄って知った。あれからというもの望が保健室で寝ていると岡田がサボりに来てあのキンキンする声を響かせていくことが度々あり、その度に保健室での安眠を奪われていた望はますます睡眠不足だった。岡田め……！喋ったこともない岡田を恨めしく思う。そのまま四時間目まで何とか耐えたが、昼休みに早退することにした。熱が出ているのだろう体の節々が痛く頭がガンガンする。

「山内さん帰るの？」

リュックに教科書を詰めていると横から声がかかった。クラスでも目立つ女の子二人組だ。

「また、体調悪いんだね」

貼り付けた心配の裏に見え隠れする嘲笑。頭が痛い、ガンガンする。

「大丈夫？早く帰った方がいいよ」

「ありがとう」とだけ答えて足早に教室を出た。上手く笑えていただろうか。

廊下に出ると熱が上がっている気がした。そのままふらふらとした足取りで歩く。

「……っ、すみません」

と、誰かにぶつかった。蚊の鳴くような声に思わず振り返る。ここ数日でよく聞きなれた声だ。ぶつかった生徒は着崩さずきつちりと着た制服に男にしては長めの黒髪で、猫背で俯きながら廊下の隅を歩いている。……まさか。本当に？

逡巡していると前から歩いてきた男子の集団がその黒髪の生徒に話しかけた。

「あ！岡田ちゃんいいところに！わるいんだけどさあ、今日のそうじ代わってくんね？」

「え……」

「な？いいだろ？」

「……で、でも昨日も僕が……」

「いいじゃん、俺たち忙しいわけ。友達だろ？」

さらに背中を丸めてぼそぼそと答える生徒をその男子達はニヤニヤとして囲みだす。

ああ。君も、泳げない人だったのか。

そういえばいつもベッドのカーテン越しに声を聞くだけで顔を見たことはなかったなと思う。想像していたイメージとの違いに驚いたが同時に納得もしていた。先生はサボりに来る岡田を一度も注意したり追い返したりしなかった。きつと分かっていたのだろう。

チャラチャラとまぶしい男子グループに対して、岡田は消えなかった蛍光灯みたいだった。相変わらず下を向きながらどうやら了承したらしい岡田の背中は今にも消えてしまいうるに見えた。

その翌日の体調は最悪だった。昨晩はモヤモヤとして一睡もできず、昨日の熱も引いていないみたいだった。一時間目は数学だったので何とかが出たが、板書をとるので精いっぱいだった。今日は数学以外に苦手教科はないので早退してもいいかもしれない。

「山内さん今日も帰るの？大変だね」

保健室に行こうと立ち上がると昨日の二人組にまた声をかけられた。

「ううん。保健室」

息が詰まってかすれた声が出る。『心配な顔』を作って尋ねる二人をすり抜けながら、今日は何としてでも終礼まで耐えようと決意した。

「ベッドを貸してください」保健室に入るころにはふらふらで先生に早退をすすめられたが、出たい授業があるからと断った。

「せんせーおはよー」

ベッドに横になると、今日も岡田が来た。今日も科学の安田の授業は眠くなるだの最近妹に彼氏ができたのと懲りずに話している。

相変わらずキンキンした声だが前ほど不快ではなかった。昨日くらい小さな声を出してくれたら、頭に響かないのに。そう思ってから少し虚しくなった。

泳げないことを必死で隠さなければならない岡田。

かわいそうな岡田。

硬いベッドにゴワゴワしたシート、消毒液のにおい、時々、先生が何やら作業する音。それから、岡田の声と先生の相槌。

その日望は久しぶりに保健室でぐっすりと眠りについた。あの、イワシの夢を見た。

佳作

ナナコ

熊本県立御船高等学校 一年

白石 明代

都立^{とまり}泊自然動物公園には、十数種の小型の種を中心とした動物たちと都心からはアマゾンの奥地へ迷い込んだような感覚さえ覚えるような豊かな緑草木が静かに暮らしている。大都会の中心という立地ながら喧騒から切り取られたこの場所は平日は散歩を日課にする老人や週末になれば家族連れの姿も見え、穏やかな時間が流れていた。園の門を抜け少し歩いたところにこの園で最大の動物であるアフリカゾウの飼育舎がぼつり、ひっそりとおかっていた。

ここにいるのも随分と長いものになってきました。わたしはここへ訪れる人々や園のみなさんから「ナナコ」とよばれるのんびりしあわせな日々を過ごしています。とくにお世話になっているのがわたしを担当してくださっている飼育員の二人で、一日に百キロのたべものを平らげるわたしの世話によく働いてくれています。その二人の年の若いほうである早^{はや}田^た有^た太^たくんは昨年わたしの担当として配置された新人飼育員で、ほんの少しばかりどこか抜けているから、わたしと同じ年でありまたわたしがこの園へきてからというものの三十年来面倒を見続けてきたベテラン飼育員である田島^{たしま}平^{ひら}造^{ぞう}からときに大目玉を食うこともあるようです。田島さんは前述した通りわたしが五歳でこの園へと連れてこられた当時の新人飼育員で、当時は彼もまた同じように先輩からよく叱られていたもので

す。そんな二人や、わたしの飼育舎の前で足を止める人々の中には、わたしにいろいろな話を聞かせてくれる方がいる。あいにくお返事はできないけれども、この大きな耳でしっかりと聞いているのです。

朝になり、田島さんが「ただいま」と言って飼育舎へ食事を持ってきてくれた。食事を終えて外へ出ると朝の散歩のみなさん方と、今日もまた、あの子が来てくれる。今日は大学の授業で自分の研究を発表する予定で、今から緊張しているのだと教えてくれました。彼女は週に三、四日、決まって朝のこの時間になるとやって来て、決まって二十分ほどわたしへこんな風に日常の中の出来事を話してくれるのです。彼女がはじめてここを訪れたのは三年前の夏でした。その時からずっと通い続けてくれているのです。彼女はなぜこの場所へと来てくれるのか、わたしは知っていないのですが、彼女がここで聞かせてくれる話が大好きでした。

本宮^{もみや}琴^{こと}加^かは泊自然動物公園の近くにキャンパスを置く大学の三年生になる。「超一流」「名門」というなによりもこの就活戦争時代もど吹く風のネームバリューに惹かれ、どうしても、と強い憧れに支えられ入学したこの大学でそれなりに、というかなんまり楽しく忙しく、充実した生活を送っている。中学時代、交通事故により両親をいっぺんに亡くしたときにはこれから先の人生なかなかハードモードだと悲観しかけたが、今になればあのとき諦めることをしなかったわたしを抱きしめてあげたいと思う。それはそうと、現在のわたしの話なのだが、いよいよをもつて就活が解禁されたことにより忙しさは前にも増していくことになる。もともとは少しの時間でもじっとしていられない、いたくない、というような属性の人間なので忙しいこと自体は苦にならないのだが、ナナコに会いに行く時間、回数が少なくなってしまうことは、琴加にとって割と憂鬱な案件であった。

今日もあの子が会いに来てくれました。なんだかちよっぴり浮かない表情をしている気がして、だからいつもより彼女の近くまで行って話を

聞きました。

「だから、わたし頑張ってくるからね。」

就職活動で忙しくなるから、きつとここへ来る頻度は減るけれどまた訪れたときには話を聞いてね、最後に口角をクツと上げて笑顔を見せてくれた彼女は小走りぎみで去ってゆきました。その後は宣言通りそれまでは一週のうち三、四日訪れていたところを週末に一、二日といった具合にはなりましたが、彼女の話を楽しみにしていたし、会いに来てくれることが本当に嬉しかったのです。

その宣告を受けた時、何故だかほっと安心感さえおぼえるほどに心は落ち着いていた。

いつも通り、ナナコにエサを用意している時だった。どうしても立っていられなくなったオレはマズい、と感じたままにその場にうずくまったらま動けなくなった。タイミングというものがよかったのか、はたまた最悪だったのか、早田により発見されたオレはそのまま救急車で病院送りとなりそこで、ステージ4、末期の大腸ガンであるということ、そして、

「次の正月、いえ、冬を迎えるのは厳しいかと…」

つまり、オレの「余命」はせいぜいあと「半年」といったところらしい。余命宣告なんて、うけるつもりはこれっぽっちもなかったんだなあ。ピンピンコロリで、そちらへ何う予定だったんだけどなあ。ナナコの飼育舎の錆び付いた檻を眺めながら声にせず呟いた言葉は誰に届くこともなく宙を彷徨っているように思えた。

怖かった。神様が分量を間違えて鈍臭さモリモリに仕上がっているはずのこの僕が、はじめて「嫌な予感」というものを理解した、気が、した。あの日飼育舎でうずくまっていた田島さんを発見した時、感じてしまった。田島さんが飼育舎へ帰ってきた日、どうしても聞きたそうにしている僕の様子を察したのか、答えは田島さん自ら語られた。

「末期のガンで、余命半年？」

驚き、とか悲しみ、とかそういうのではなくてそれを超越した何かがあった僕はただオウムのように田島さんの言葉を繰り返すことで目の前に突如として突き出された現実、いや、ある程度自分の中で覚悟していたはずだった現実を反芻してなんとか飲み込むことに努めた。

夏になると、わたしを取り巻く環境が大きく変わりました。まず、田島さんがこの飼育舎へ帰ってきていません。もう一か月は顔を見ていません。なぜなのか、今はどこでなにをしているか、そして次はいつ会えるかな、といういろいろありますがわたしに知る術はありません。そのかわり、と言うのもなんですが、早田くんが以前の田島さんのように一人でわたしの面倒をみてくれるのです。暑い暑い真夏の昼、田島さんもしてくれたようにホースで冷たい水を浴びさせてくれるのです。

その年の十二月の始めに、田島さんは亡くなった。最後までナナコと、僕のことを心配しながらいつもみたいに笑っていた。

冬になると飼育舎に田島さんの写真が置かれました。いつもの様に笑っている田島さんはニョキッと写真立てから現れそうで、想像すると笑えます。もう、かなりの間会っていないけれど、元気にしていますか？たまには、会いに来てくれるのも良いのに、と思ってしまう。

あれからどれだけ時間が経ったのでしょうか。結局、まだ一度も会いに来てくれませんね。わたしも早田くんも、当たり前ですが年を重ね、早田くんなんて田島さんの年齢にも近づいて…そうですね、わたしの中にいる田島さんはあの時のままでいるのです。

いつもより、よく眠った気がしながら目を覚ましたそこは、美しい場所、そこには最後に会ったあの時のまま、いえ、すこしばかり痩せたようにも見える笑顔を見つけました。

「オマエもばあちゃんになったんだなあ。」

入 選

「今日僕は傘を忘れたことになっている。」

東京・朋優学院高等学校 二年 村田 菜月

「モルモット」

福岡県立明善高等学校 二年 原田 真緒

「マカロン・トイレットペーパーのロマンス」

千葉・麗澤高等学校 一年 高橋 芽意

「彼岸花の追憶」

富山県立富山高等学校 三年 松原 芽衣

「願いの石」

長崎・聖和女子学院高等学校 三年 岩木ひより

「STAGE」

宮城・常盤木学園高等学校 三年 渡邊 奈緒

「緑色の日記」

岡山・津山工業高等専門学校 二年 坪井 元春

「三分間」

東京・クラーク記念国際高等学校 東京キャンパス 二年 梶 智暁

「ストライキ」

東京・海城高等学校 二年 児浦 利幸

「カッター」

青森県立弘前高等学校 二年 草刈 邑依

短篇小説の部選評

作家

井上 孝雄

今年は昨年より一〇〇編多い約六〇〇を越える作品が集まったとのこと、その中の三十一編を審査員三人で審査した。

どの作品も力作揃いで、とても面白く楽しませて読ませていただいた。いつもながら思うのだが、応募者の若い感性は素晴らしくそのパワーに圧倒されている。それぞれの作品には日常に感じたことを様々な形の言葉で紡いでいく、そんな等身大の高校生たちの日々の姿を見受けることが出来た。また、今年の特長として「死」をモチーフにした作品が多かったという感想が審査員の中で交わされた。「青春」という言葉を持ち出すのが妥当かどうかかわからないが、人生の中で「生」真つ最中、精力的な時期である高校生がその対極の「死」について触れた作品が多かったのも「生」と「死」は対極でありながら裏表のように近いものであるのだと改めて考えたりもした。

最優秀作は『ハンバーク爆弾』とした。祖父の死を消化しようとする女子高生の小説で、人間は心の奥に様々なものをかかえて成長するのだと気づかせてくれる小説でもあった。きっかけは祖父の死に関連して起こる従兄への嫉妬、祖父の言葉を巡ったもの。人間は他者との間

や様々な事象の中でわき起こる押さえきれない感情を自分の心のサイズにあわせてため込むものだと思う。しかし、ため込むことの難しいもの、消化しきれないものはやがてオリのように心に沈殿され、いつしか堰を切ったように溢れ出すのではないか。それをこの作品は「ハンバーク爆弾」と表現し描いている。誰の心の中にもあるものかもしれない。作品として良くまとまっておりラストはしつかり終えられている。さわやかな印象を残す良い小説として最優秀にはふさわしいと審査員で一致した。

以下、二作が優秀賞作品。

『青を焚く』、大切な人の死や、新たな道へ進む：人生を何度かリセットする時が人にはあると思う。その際の儀式として焚き火をするという小説でありその過程を描いた作品である。まだ寒い3月の早朝主人公と父は様々な思い出を海岸で燃やし続ける。そして炎を眺めながら過去を振り返り一つ一つ自分の心で整理していく：前述の「ハンバーク爆弾」とは違う形の心の消化を思わされた。その過程、登場人物の一つ一つの行為にとっても引き込まれた。焚き火の炎の描写が巧みに心情表現と重なり、絵画的な雰囲気を感じ出している小説としてレベルの高さを感じた。

もう一つは『春の七草』。「せりなずな」という名前の女の子と文芸部の部長である男子高校生が登場人物。この小説はとても軽快で弾むように、読みながら思わず吹き出しそうになった。会話文が多いことが欠点にならず逆に生き生き

とさせキャラクターを魅力的にさせていた。歳時記を巧みに取り込んでおり、最後はちよつぴり希望も描かれているまとまった小説であった。

以上選評であるが最後に、審査の途中「この小説文体がいいね」ということが何度か語られた。様々なアイデアを考え、キャラ設定、プロットなども考えて創作されていることと思うが、文体なども意識するとより一層よいものになるのではないかと考える。

それでは来年も高校生の若い力に出会うことを楽しみたい。

●井上孝雄(いのうえ たかお)

昭和三十八年東京生まれ。國學院大學大学院文学研究科博士課程前期修了。公立高校国語科教員。筑摩書房地域教科書編集委員。文部科学省生涯学習政策局男女共同参画学習課委員。所属団体、國學院大學国語教育研究会、日本国語教育学会、日本文学協会国語教育部会。最近執筆の論文、「村上春樹『レキシントンの幽霊』論 ―作品の魅力と学習材としての魅力―」（二〇一五年）。「三つの小さな物語 ―学習材としての川上弘美『水かまきり』論―」（二〇一六年）。「主権者教育についての一考察 ―村上春樹『青が消える』（Losing Blue）を教室で読む―」（二〇一七年）。

最優秀賞

道端に枯れた花

神奈川県立麻生高等学校 二年

丸山 優月

浜辺を疾走しながら叫んだ

塩水の塊に落ちる

浮き袋のせいで沈めないまま

体に染み込む水分を

スポンジの舌で

ゆっくり味わった

蛇管に塩水がつたう

君の味によく似てる

冷えた体をあったかい砂の鉄板で焼く

私の匂いの湯煙は朱色の空まで届くかな

塩水を吸い上げすぎた目から水が垂れた

私には大きすぎるTシャツで拭いたら

余計に寂しくなった

投げ捨てたサンダルを拾い集めて

ママじゃないけどチャリに乗った

段ボールが落ちてゐるから拾おう

君がいなくなつて広くなつたアパートに帰った

狭い空間が恋しくて

ガムテープで段ボールを直した

昔君はいじけて段ボールに籠つて

でてこなかったことがあつたね

でもその後ちゃんと仲直りして

君が段ボールから出てきた時

どっちも花みtainな笑顔だつたな

今日は内側からガムテープを貼る

そしてさよなら

優秀賞

辞書を引く

神奈川県立横浜翠嵐高等学校 二年

伊集院 亜衣

辞書には世話になっている

たぶんバスより多く使っている

今日は三時間目の古典で

一回も使わなかった

それは、銀河。ギンガリゼーションであるよ。

天の川が二つになると地球が終わるらしいけど、

この世界を救うための合い言葉は

「地学準備室」

ああ。それってなんか、**紅生姜**。べにしょりがりぜーしょんです。

たぶん焼きそばかたこ焼きのそれと似ている

でも毎日辛い、だから

クッキーに混ぜた

お湯、まんたんのお湯でクッキーをふやかし続ける老婆

命題Ⅱ表

そこにコンフレークが…!!

それはとても甘美なものであるよ

「『おいしい、お茶。』ってタカヤマが。」

冷たい

そう、私はひんやりとした空間でくらげを見ていたのだった

いや、私がくらげだったのかもしれない

M O M I

という概念

あなたのその意欲を買いたい

バーゲンでこの前売っていたような気がする

売っていたような気がするのだ

整然と並べられた辞書のように

優秀賞

クレイハートの臨床試験

神奈川県立麻生高等学校 三年

山崎 早恵

一緒に歌を歌おうか

7ミリの罫線のノートに吐き出す、無気力で優しい母の話
昔拾ったボトルメールにささやく、粘着質で無粋な父の話
誕生日にもらった砂時計に漏らす、偏屈でむなしい僕の話
悲しくなっても歌は聞こえる

ガラクタまみれの身体になっても

お人形のままでいい

きつと この町に郵便は来ないから

部屋でハーブティーを飲んでいても

ちつとも安らぐことなんてないじゃない

ノスタルジックの失墜とちいさな狡い魔女

たとえ喜劇の中の悲劇だったとしても

決して誰かが望んだ悲劇ではなかった

悲劇にあこがれる少年には 夢の様にまた明日、と

この心に

まだ見ぬ廃墟を気にするだけの余裕はない
無くす記憶はゼログラム

脆く碎けた 臨床試験

佳作

時間

神奈川県立麻生高等学校 二年

関谷 実咲

九月の中旬なのに蟬が鳴く

木々が空を覆い、点々と漏れる光

私はまだ目が開かない

脳が動かない

ジャリジャリと木の実やら小枝を踏んでは

ハンカチを首元にあてる

汗ばむ背中に生暖かい風が吹く

じんわりと溶けていくようだ

誰もいない朝の教室

目を閉じて耳を澄ませば

騒がしい風景が思い浮かぶ

普段では味わえない時間

目を開けて耳を澄ませば

机に浮かび上がるカーテンの影

ノートのページが捲れる音

数々の机が教卓にいる私を威圧しているようだ

そろそろみんなが来る時間

九月の中旬なのに蟬が鳴く

佳 作

女の子

宮城・聖ウルスラ学院英智高等学校 三年

金森 悠夏

心の温度がぐっと下がり

あの子が傷つくであろう問いを心で小さく投げかける

今日のあの子は特に女の子している

声の上澄みがいつもより澄んでいて

しぐさの一つ一つに神経を通していることに

私は気が付いている

イマドキではないからあからさまではないけれど

心の端が少し溶けるくらいの毒を

あの子が言葉に含ませた理由を私は知っている

だから傷ついた顔を見せてはあげない

でも

座り込んだ円の中で

悪口を添えたバスケットボールを回し合うあの子の姿は

人間らしくて

女らしくて

そのことに落胆した

たぶん私は女の子をするあの子を軽蔑しながら

女の子であり続けるその姿を求めていたのかもしれない

駅前で見かけた彼女は

背伸びすることもなく

コスメシヨップの背景に溶け込んでいて

視線が交じり合うこともなく

私は人の流れに合流した

女の子をするあの子は

不思議と魅力的で

限られた時間に彩られていた

今日も私は反射した窓ガラス越しに

あの子の中から去っていく女の子の姿を

惜しみながら探すだろう

佳作

The West Exit. (西口)

埼玉県立鴻巣高等学校 二年

加藤 優奈

※ テロン テロン テロン

女の子の匂いをつれて

スチームパンクな駅前に行く

前を向いたらピンヒール

下を向いたらゲロと痰

テロン テロン テロン

今日も子供が働きに

地獄町 チャリを漕いでいく

まともな野郎は消えてった

電車に乗って 働きに

テロン テロン テロン

明日の電車は何に泣く？

今日も止まった高崎線

前のめり 下を向いて歩く

死んだのは私みたいな女

テロン テロン テロン
青い踏切に花束が一つ
貴方だけは忘れないでいて

※踏切警報機の音

佳 作

雨の日

香川県立観音寺第一高等学校 二年

宇草 和弥

雨を見ていた

曇り空から、雨が降り出し、丸く落ちる

滑らかな直線、風に煽られて、曲線

透明が重なって、白、更に重なって、青

アスファルトの、車窓の、猫の上に、落ちて

弾かれて、もう一度、宙に

粒が青く、放物線を描き

街の光が、中で混じり

もう一度、夢を見て

落ちた？それだけ

もう、跳ねない

空を眺めると

まだ曇り空

光は弱く

街中に

また

雨

曇り空を見て、僕は笑った。

晴れていたらきつと出なかった、笑顔だ。

虚偽の申告

神奈川県立横浜翠嵐高等学校 三年

原 唯菜

まずは言葉の話をしよう
やかんが音をたてるまで
豊かな国に生きていて
ただぼうつと過してる

悲しいと思わないかい？

ノスタルジアを追い求め
メカニカルには程遠い
ルポルタージュは曖昧な
カストロフィをもたらず
とかく人々は忙しい
ルビーグレイプフルーツを
したたかに踏んだところで
理由づけすらないだろう

——本当に？

ずっと考えていたんだ
表立っては言わないが
もちろん忘れたわけじゃない

しかとその目に焼きつけて
論じるなりなんなりすればいい

今に始まったことじゃないって？

からかわないでくれたまえ
ランダム・ウオークの問いよりも
よほど簡単はずだろう

もしも君がかたくなに
頷かないと言うならば

ねばりたいだけねばればいい
面倒なことになるけどね

類概念の反対を

特別小さくしていけば

ミーズムすら超えるほど
無き事をまたくり返す

擬人化された人々が

最たる例と言えようか

いつの間にかに消えていて
忽然とまた現れる

嘘みたいだけど、本当なんだ。

入 選

昼夜と電車

埼玉県立深谷商業高等学校 一年

柳田 琴音

夜、電車の音がするんだ。

駅は遠いし、おまけにボクは布団でとつくにまどろむ時間なのに。ガタゴトガタゴト繰り返しボクを起こすんだ。ボクはこれを聞くとなんとも言えない気分になるんだよ。なんてこんな汚い毎日生きてるのかってね。ああ、いい音だな。あの子にも聞かせてあげたいよ。

あの子、すぐねちゃうんだよ。

すぐにねちゃうあの子に、電車に乗って今すぐ会いに行きたいよね。そして、あのきれいで長いまつげに深い青を落としたい。

昼は優しくないからきらいなんだ。明るいと皆の中の汚い部分が丸見えでさ。生きたくなくなるよ。夜は暗くて君がねちゃうけど、三十分でも君と話せる分、幾らかました。なんで生きてるのか理由なんて幸か不幸か、君以外の何でもないね。実感して目をとじた。

入 選

意識

群馬県立桐生女子高等学校 一年

沖村 南美

ところでみんな息してる？

息をしているかどうかと聞かれるとよけいに意識して息をしてしまう。

ところでみんなまばたきしてる？

まばたきをしているかどうかと聞かれると

よけいに意識してまばたきしてしまふ。

これは意識だ。意識のせいだ。

無意識だったのに、

無をはずされてしまった。

無は何もないという意味なのに無を奪われてしまった。

悔しい。悔しい。

してやられた。

なんでそんなこと言ったんだ！

息をするときの一回一回が深呼吸に

まばたきをするときの一回一回が寝てるみたいに

全部がぎこちなくなつて、行動が支配される。

支配される、という意識も入ったせいで

他のみんなも支配されているのだろうか

前の席の子、横の席の子、もしかしたら、机、椅子、ふでば

こなんかも、

全部が気になって、気になって、

と、やってるうちに、いろいろなんか忘れてた。

なんだ、これでよかったんだ。

これですっかり解決じゃないか。

よかったよかった、めでたしめでたし。

ところでみんな息してる？

入 選

十分じゅうぶん(或いは放課後)

奈良県立奈良北高等学校 三年

山野 あやね

指の形をした貝殻が残す
暗い緑の壁に浮かぶそれを、
柔らかく弾力のある老竹で
撫で下ろす

緑と緑の間でそれは
擦れて

白い煙になってしまふ
舞い降りて

溶けない雪になってしまふ

それは吸っても薬のように
喉から水を取るだけで
人生にはならない

それに触れても狼のように
母山羊に化けるだけで
知識にはならない

距離を取り木に座り下を見る
細い鼠が三十五列に並ぶ
その中には梅擬や蛍の光も並ぶ

前には『黒』と呼ばれる
緑が広がっている

ツルつとした黒は

さらつとした白

そして灰

やがて無色となって

文字は 言葉は

私たちを育てる

入 選

海と人間

長野県諏訪清陵高等学校 三年

小野木 葉月

僕らは高度な技術の中に埋もれている
自由に泳ぐ時代にいる

大きな鯉 小さな金魚

それぞれは違っても

それぞれはそれぞれなのだ

筆の海が黒く羅列する

それは世界が減ぶ寸前のように

ブルーライトが世界を照らす

青白い肌が触れ合いたいと

その光を見つめる

光が突然消えてしまふと

人は惑う

魚は磁力を失い泳ぎ泣く

バスを待つ

海になった待合室で

そこでは人間性が失われない

あの頃は輝いていた

海を見つめていても飽きなかった

ただ今は下を俯くばかりで

それが当たり前で
当たり前が当たり前になる

それが当たり前なのだけれど

魚は泳ぐのだ

必ず前を向いて

それが当たり前なのに

当たり前ではないのだ

こだまは返ってこない

山はあるのに返ってこない

それは海の中だからだろうか

いや

それは違う

山はこだまを知っている

けれど返さない

返してくれない

清き水は枯れてしまったのか

魚は魚だ

魚は共喰いをする

弱者は強者になる

群れを作ろう ああ赤い魚を瞳にして

生き延びよう

矛盾が成り立つこの世界で

入 選

そして私は制服を着る

神奈川県立麻生高等学校 三年

村松 苗青

私の愛しき友よ

(この世はあまりに広くって、どうせなら生まれたときから生きる道を指し示してくれればいいのにと、そういったあなたの横顔は少しだけ嬉しそうだった。人間ほど自由に縛られた生き物はいないと、そういうあなたは。知ったようなことを吐き出すその唇の薄さと、呪いのようにまっすぐ伸びた髪を見て、皮肉にもほどがあるなと思った。確かに私はそう思ったのだ)

桜に攫われそうだと告げたことをあなたは覚えているのだろうか。或いはその答えを覚えているだろうか。君は私を笑うでもなく、罵倒するでもなく、ただ私の瞳をまっすぐにとらえて、攫って見せてよ といった。嘲るように笑っていたのだ。

(私は私が誘拐犯として生まれなかったことを悔いた。確かにあなたの言うとおりに生まれてきたのであれば、あなたを攫うことを躊躇うこともなかったのだろう。細い身体を引き寄せて、すっぱりと腕の中に収めたまま桜の海に飛び込むこともできたはずなのに。私はただあなたの笑みを痛々しく思うだけで、指の一本だつて動かしはしなかったのだ。それはあまりに哀しいことで、誰かが好みそうな救いような話である。)

あなたは桜に浚われることはなかったけれど、ただひっそりと消えていった。猫が死の直前に姿を消すように、もしくは初めからいなかったとでも言いたげに。ただただひっそりと消えていった。

(それから私はあなたを見ていない。そのまっすぐな黒髪をなびかせて、或いはバツサリと切りそろえて、春の亡霊のようにまた私の前に現れるのかもしれない。そんな妄想を抱いたままに、私は今日もセーラー服に腕を通す。)

入 選

慈悲深き希望論

神奈川県立麻生高等学校 二年

川嶋 美沙希

信じていいよと言って

まるで生まれた国が違うみたいな顔をして私を調子に乗らせて

ああ、五感がうずうずして気が気でない

二人の間にあるのはほら、あの二文字だけ

私を箱の奥にしまわないでこの二人ならどうにもならないことだつてどうにかなる
神様がそうおっしゃっている

ここは慎重に行きましょう
そこは勢いのままに行きましょう
いつから保険をかけるようになったのだろう
嘘偽りのない笑顔をあとい回見るためなら
真っ直ぐ走れた自分は何処に逃げたのだろう

片足でも前に進めるはず
入道雲をすり抜けた先
きつとどこかで貴方は鳴いている
そしてここであいつも鳴いている

ドラマの中じゃちやうどヒーロー
のお出ましか
それともつと奥に押し込まれるか

この精神かけた一発勝負
あいにく誰にも譲れるものじゃない
握って潰さないように
離して逃がさないように
やっと同じ方向を
向けたかもしれない

私の心は針金みたいにすぐ歪むんだ
貴方の形に合わせられるんだ
肩幅の大きさには敵わないかもしれ
ないけど
背伸び位出来るなら

うわあとと思えば後には引けない
こうしている間にも
また

入 選

僕には聞こえない

神奈川県立麻生高等学校 二年

小村 瑠菜

気が付けば始まった夏休み
暑い部活

太陽に照らされるハードル

無造作に放り出されたバトンとストップウォッチ

ベンチに置かれた真新しいタスキ

ラインカーは曲線と直線を完璧に描いていた

部活終わりの君はプール上がりのようで

私はあわてて顔をそらすけど

振り向くと

君の背中は私の目線より少し高いところにあった

冷たいスポーツドリンクを入れて水滴に濡れたボトル

個包装してある塩分補給用のタブレット

私は渡すだけ

部員のタイムを書く記録用紙

私は測って、結果を彼に伝えるだけ

「明日の大会頑張って」

彼には聞こえない声で

入 選

色鉛筆のはぐれ者

神奈川県立麻生高等学校 二年

矢田 安侑子

あの日虹色の夜を見た

憂いを帯びた君の目から零れた宝石に

僕の姿がなかったから

相変わらず赤いクレヨンの頬に

僕の夢を預けて

恋した罰を待っていたのだ

この青い世界で君は一人

冷気を飲み干したはずんでいた

投げた心の行方も知らず

二分前へ駆け出した

熟れた気持ちとサンダルと

思い出せない青空で

降り注ぐ愛が空に溶けたとき

藍色の少女が泣き出した

何処かに咲いた想いも

一つ残らず枯れた夜

白々しく笑ってみた

入 選

画面の向こう

東京・麹町学園女子高等学校 二年

内山 綾

お客様がやってきた

イエスもノーも知らぬ田舎者

礼儀を無視して楽しいか

画面の向こうはサーカスだ

みんな狂ったように手を叩き

仮面を被ると安心して

体を刺しても気がつかない

世界にひとつの灯を

誰が弁償するのかな

素敵な学び舎大発見

饒舌教師が講義中

たくさん学べてうれしいね

画面の向こうで勉強会

みんな狂ったように集まって

わかりましたと喜んで

赤点とつても見て見ぬふり

脳裏にひとつの気持ちしか

残っていないなら苦しいね

罪も幸せも絶望も

一瞬で吐き出せる画面の向こう

とても素敵なところだけど

たまには顔を上げてほしい

それからいつもの場所で集まって

たくさん話そう笑顔でさ

それで明日を夢見てさ

肩組んで一緒に帰ろうよ

入 選

ごんご

岡山・津山工業高等専門学校 二年

石井 琢朗

今日の河原では

珍しく河童が芋を洗っている

いつもと違う喧騒にまみれて

LEDの赤提灯がさんざめく

「あそこの唐揚げがおいしそう」

「なんだか気分が悪い」

そう嬉々として吐き捨てながら

ぼくらは自ら芋に成り下がる

そこで誰もが口にし

誰の耳にも残らない

この油泥の食卓の主の名が

夜の群をつんざく

火薬の香りで化粧をした芋たちは

いよいよそろ歩きを始める

楽しそうに、河童の、昏き口の中へ

ではそろそろ

いただきます

現代詩の部選評

詩人

水無田氣流

今回で、本コンテストは二回目の選考を務めさせていただきました。現代詩部門への応募作品数は、昨年は六五二篇でしたが、今年は一三七八篇と倍以上の応募となり、嬉しい限りです。今回は全体を通じて「虚（うつろ）」という言葉を使う人の多さが印象に残ったと感想を述べましたが、今回はもう少し、言葉の表層と内実のずれを意図的に描いた作品が目立ったように思いました。

奇しくも、二〇一七年流行語・新語大賞を受賞した言葉は、「付度」と「インスタ映え」で、ともにコミュニケーションにおける表層と内実の、いわく言いがたいずれを表明しているようにも見えました。前者は、話者の意図を聞き手が慮ることを要請してしまうという、文化人類学者のエドワード・T・ホルの指摘した日本人の「ハイ・コンテクスト文化」特性が政治の場でも今なお大きな力を持つことの証左でしょう。後者は、文字通り「見せたい自分」を日常的に過剰に演出するという意味で、消費が劇場化した現代社会を象徴しているように思います。

制度学派経済学の創始者ソースタイン・ヴェブレンは、かつて有閑階級が富裕層である自己を周囲に喧伝するために派手な見せびらかし消費を行うことを、「誇示的消費」と呼びましたが、差し詰めインスタ映えに代表される消費行為は、メディア化された「明るく楽しい消費者階層」であることを見せびらかすための「新・誇示的消費」とでも呼べば良いでしょうか。

SNS、とりわけインスタグラムやLINEなどは若年層の利用者が多く、「スマホネイティ

ブ」と呼ばれる高校生のみなさんは、おそらくビジュアル・コミュニケーションが日常にあふれる生活を送っていることと思います。その意味で、言葉で「伝えられるもの／伝えられないもの」とビジュアル・コミュニケーションとの差異を意図的に盛り込み得たような作品が、やはり良作として印象に残りました。

現代詩は、その表現技法上エンターテインメント性が低く、今回も全体的に動きのない、スタティックな作品が多く見られました（決してそれが、作品として悪いという訳ではないのです）。そのような中で、最優秀賞となった丸山優月さんの「道端に枯れた花」は、「疾走」「叫んだ」「鉄板で焼く」「チャリに乗った」等、動きがありかつ強い表現が縁語のように連ねてある作品で、異彩を放っていました。通常、このような強い表現を隙間なく続けると過剰になってしまうがちで、ベタなパワーポップのリリックのようになる恐れもあるのですが、詩の速度と時間のずれの描き方のバランスが絶妙なため、良い意味で壊れています。

優秀賞となった伊集院亜衣さんの「辞書を引く」は、文字の大きさまで工夫した、有名詩人で言えば吉増剛造さんの手法がポップになったような印象の作品でした。「世話になっている」バスと辞書。意欲を「買う」がずれて、「バーゲンセール」に。商品名と意思表明の、ずれ、ずれ、ずれ。とてもクレバーな詩だと思いました。難を言えば、終連の「行、必要でしょうか。それよりも、その前の行「売っていたような気がするのだ」で止めた方が、詩がもっと快適に壊れたのではないのでしょうか。

同じく優秀賞となった山崎早恵さんの「クレイハートの臨床試験」も、「7ミリの野線のノート」「ポトルメール」「ガラクタマみれの身体」「ノスタルジックの失墜」と、家族成員との対が見事でした。日本語のカタカナ遣いは表意文字性をむき出しにする特性があるので、読み手に無機質な音の感触を響かせる効果があるので

すが、上手い使い方だと思います。ただ、本作もそうですが、終連の「脆く砕けた 臨床試験」で、オチをつける必要はあったでしょうか。その前の行、「無くす記憶はゼログラム」で止めた方が、絶妙な不協和音で終わる曲のようで、良かったのではないのでしょうか。優秀作二篇は、このように上手いけれども言葉を壊す勇氣が若干足りなかったかな……という点で、若干残念でした。これは、他の佳作や入選作にも通じる点です。

詩は、壊れるべきなのです。なぜなら、言葉はコミュニケーションの道具として十全に機能しきつてしまうと、詩情が入り込む余地がなくなってしまう傾向が見られるからです。言葉を壊すためには、通常の言語使用のときに纏う「言葉の鎧」のようなものを、ぼろぼろと落としていく必要があると、私は思っています。

● 水無田氣流（みなした・きりう）

昭和四十五年神奈川県生まれ。早稲田大学大学院社会科学研究科博士後期課程単位取得満期退学。平成十四年から、水無田氣流の筆名で思潮社の『現代詩手帖』に詩作品の投稿をはじめ、平成十五年に第41回現代詩手帖賞を受賞。平成十七年に『音速平和sonic peace』（思潮社）を出版、翌年に同作で第11回中原中也賞受賞。平成二十年、『Z境』で第49回晩翠賞受賞。また社会学者としても活動し、学術論文の執筆などを行うほか、評論に『シングルマザーの貧困』（光文社新書、平成26年）、『居場所』のない男「時間」がない女（日本経済新聞出版社、平成27年）等多数。平成二十五年度朝日新聞書評委員に就任。平成二十八年四月より國學院大學経済学部教授。

最優秀賞

東京都立日比谷高等学校 一年

桐生 莉緒

語り継ぐ過去の過ち惨劇を兵器が朽ちて花宿るまで

優秀賞

埼玉県立伊奈学園総合高等学校 二年

滝澤 昂希

一画を足せば「辛」さは「幸」せにそうだと信じて踏み出す一歩

福岡・西日本短期大学附属高等学校 三年

鶴本 彩花

私の名忘れた祖母の手を握り「大好きだよ」と小声で伝える

佳作

福岡・西日本短期大学附属高等学校 三年

黒田 陽嵩

幼くして逝きたる兄の墓参り合掌解かぬ母の暮れゆく

神奈川県・聖ヨゼフ学園高等学校 三年

安村 玲美

人々は四角の画面見続けて人間らしさ捨てたみたいだ

大分県立爽風館高等学校

岸本 恵美

人型のロボットあふるる近未来涙腺あれば多分人間

群馬県立太田高等学校 一年

高草木 佑弥

「おかえり」と家族の帰りを永久^{とわ}に待つ割れた鏡の幼き手形

千葉県立安房高等学校 二年

保田 千奈

朝7時掛け声響く光る海ライフセーバー気合いを入れる

入選

千葉県立安房高等学校 二年

黒川 琴音

人々はつながり合って生きている結び合わせた星座のように

埼玉県立浦和第一女子高等学校 一年

南 花瑠乃

代替品なんてないからその命悔いのないようもつと輝け

岡山県立岡山城東高等学校 二年

土屋 文彦

帰宅して母の部屋から聞こえてるミシンの音に心やすらぐ

千葉県立安房高等学校 二年

加瀬 詩織

家の中思わぬ所にそよ風が涼しむ場所は猫に教わる

東京・クラーク記念国際高等学校 東京キャンパス 二年

唐澤 智行

忘れない忘れぬようにくり返し原爆の歌今年も歌う

福岡・西日本短期大学附属高等学校 三年

辻 菜々子

祖母の家泊まりに行ったお正月布団の厚さは愛の大きさ

沖縄県立真和志高等学校 一年

廣井 陽一

校舎を出て初めて気付く時雨には僕の心が溶けていたんだ

埼玉県立上尾南高等学校 三年

千味 祐人

見えないところで汗流す人を尊敬する世界は貴方らに支えられてる

大阪市立咲くやこの花高等学校 三年

駒谷 遥也

ラムネ瓶閉じ込められたビー玉は君の瞳に少し似ていた

宮城・常盤木学園高等学校 一年

高橋 凜

震災後七年ぶりの海開きみんなの笑顔は平和の象徴

短歌の部選評

歌人

田中 章義

北海道から沖縄まで全国から四千二百首もの作品が寄せられた今回。入選歌以外にも注目した作品が多かったので、今年は初めて短歌部門の「百人一首」を選考してみました。

紙幅の許す限り、何首かを紹介してみたいと思います。都道府県名は学校のある住所での紹介です。

「白線を踏まないように登下校道無き道を僕は行きたい」(神奈川・松長諒)、「祖母の手が立てる線香ほっそりとされど真つ直ぐ祖父と向き合う」(千葉・池谷璃穂)、「唯一という字をみんな臨書する午後の冷房効きすぎている」(福岡・雪吉千春)、「一日がJアラートで始まった恐怖で目覚める未来は嫌だ」(新潟・眞島幸音)、「阿波っ子は寝ても冷めても阿波踊り今夜もくりだせ紺屋町」(徳島・船越麻由)、「農作業何だか暑さを忘れそういっしょに笑う祖父がいるから」(福岡・彌吉巧須)、「夕焼けに染まった空に空襲のあった七十数年前を見ている」(埼玉・斉藤紗良)、「打ち上がる花火の色は変われども胸に咲く花濃くなるばかり」(埼玉・北村啓太)、「嘘をつけドーナツの穴空白は誰かが

所有できるものじゃない」(大阪・藤井疏乃)、「僕の恋炭酸水のような恋君に絶対振られたくない」(千葉・大谷一馬)、「静の中勝敗決める一音や青春捧げる競技かるた」(神奈川・桐谷七彩)、「道端に命の尽きし法師蟬夕暮れの中土へと還す」(福岡・高松麗華)、「便利さを求め広がる『田社会』忘れたくない手紙のぬくもり」(神奈川・福井春菜)、「放つ矢に心をこめて的を射る真夏の夜の遠い残響」(埼玉・石川幸人)、「母よりも祖母の言葉が身にしみて机に向かう夏の始まり」(宮城・新井野乃佳)、「自由無き陳列棚の虫籠で外を夢見る甲虫かな」(千葉・畠山諒)、「不意に鳴るぜんまい切れた古時計まだ動けると伝えるように」(群馬・藤田翔流)、「人間は進化しすぎたんだよって発展途上な僕らが語る」(福島・秀島由里子)、「晩酌の父の隣りに正座してそつと差し出す進路志望書」(茨城・猪瀬美夢)、「少年は愚かであれよ永遠の二月を走る夜行バスに乘れ」(神奈川・戸塚麗)、「冬の夜のベンチに座りぼつぼつとすき間だらけの恋の告白」(福岡・黒野里奈)、「笑う人真顔の人に怒る人いろんな人に出会うレジ先」(神奈川・津ノ井莉奈)などの作品に着目しました。学校単位での応募では福岡県の西日本短期大学附属高校、千葉県立安房高校の生徒に秀歌が多く、指導者に恵まれた生徒たちはとても幸せだなあと思いました。慶應義塾志木高校、神奈川県立横浜翠嵐高校、東海大学付属静岡翔洋高

校など、今年新たに注目した学校も多かったです。

願わくは、高校生の皆さんには今後も短歌をつくり続けてほしいと思います。短歌の魅力は一首より十首、十首より百首をつくったときにこそ見出せるものなのだと思います。たった三十一文字でも、心を込めて紡いだ一首は、時に未来を切り拓く鍵となり得るものです。他の誰とも違う、自分だからこそその一首をぜひとも見つけてください。

●田中 章義(たなか あきよし)

昭和四十五年静岡県生まれ。慶應義塾大学総合政策学部卒業。大学一年生のとき第36回角川短歌賞を受賞。以後、「地球版・奥の細道」づくりをめざし世界を旅しながら、ルポルタージュ、紀行文、絵本など多数執筆。世界で詠んだ短歌が英訳され、平成13年国連WAFUNIF親善大使に就任。JICA「21世紀のボランティア事業を考える会」検討委員、国連環境計画・地球環境平和財団「地球の森プロジェクト」推進委員長、ワールドユースピースサミット平和大使などを歴任。短歌集の他、絵本や人物ルポルタージュなどの著述もあり、松井秀喜選手や北島康介選手の社会貢献活動を紹介した単行本も執筆。BEGINなどミュージシャンの歌詞も手掛けている。

最優秀賞

福岡・西日本短期大学附属高等学校 三年

山下 茜莉

月涼しまだ履き慣れぬ下駄の音

優秀賞

青森県立七戸高等学校 三年

長澤 大我

故郷に悪友ひとり鳥渡る

福岡・西日本短期大学附属高等学校 三年

原田 千寿

南風頬張るシャツが向かう海

佳作

埼玉県立上尾南高等学校 三年

松澤 茉奈

晩夏光夢に到達する速さ

鹿児島・ラ・サール高等学校 一年

河野 伊吹

来るのなら雪も一緒に連れて来い

福岡・西日本短期大学附属高等学校 三年

内野 有咲

天を撃つ竹の大砲どんと焼き

茨城・常総学院高等学校 二年

白井 翔

夏の夜の螺鈿さざめく琵琶の音

埼玉・慶應義塾志木高等学校 二年

岩見 優志

桜さく一本道を一人行く

入選

二塁手の守備位置深し獺祭忌

岩手県立水沢高等学校 三年

村上 瑛

十薬の匂いのように刺さる恋

愛知県立幸田高等学校 一年

大橋 愛香

亀といて声の聞きたし白日傘

京都・同志社国際高等学校 三年

吉本 沙生

雨つぶの音静々と若草へ

東京・安田学園高等学校 一年

北村 祐

子どもらの歌声響け原爆忌

長崎・純心女子高等学校 一年

福田 星来

蝉の目は輝いており死してなお

岩手県立水沢高等学校 三年

菅原 はなめ

スパイクの砂を払ひて晩夏光

岐阜県立吉城高等学校 一年

松田 将吾

透かし彫りの海月が浮かぶバケツかな

神奈川県立麻生高等学校 二年

町田 萌絵

吹き抜けにホルンが響く夏休み

東京・芝高等学校 三年

宮本 舶

向日葵や真っ直ぐな目で君に向かう

福岡・西日本短期大学附属高等学校 三年

江崎 美結

俳句の部選評

俳人

堀本 裕樹

第二十一回全国高校生創作コンテストに応募してくださった皆さん、ありがとうございます。このたび、俳句部門の選者を初めて担当させていただきました。どんな句に出合えるか、期待に胸を膨らませながら一句一句に目を通していききました。

総評としては、俳句の基本である季語や切字などを学んだうえで真剣に作っている人と、そうでない人との差が激しいなと思いました。説明や報告や標語のような、ただ五七五で詠んだものを俳句と考えているのであれば残念なことです。俳句は詩です。次回はさらに多くの詩心の高い作品を期待しています。

では、入選を果たした句を観ていきます。

月涼しまだ履き慣れぬ下駄の音

最優秀賞の山下茜莉さんの作品。季語は「月涼し」で夏。祭か花火大会でしょうか、浴衣を着て履き慣れない下駄で出掛けたのです。単に履き慣れないだけでなく、その音まで詠んだのがこの句の繊細なところです。履き慣れていればいい音をさせますが、どこかきこえない下駄の音を自分で認めているのです。頭上には夏の涼し気な月が出ており、待ち合わせしている誰かと会うであろう清新な喜びの象徴のようにも見えます。これから始まるかもしれない恋の予感を「まだ履き慣れぬ下駄の音」に聞き取って

も物語が広がりますね。

故郷に悪友ひとり鳥渡る

優秀賞の長澤大我さんの作品。季語は「鳥渡る」で秋。この句の「悪友」は「親友」と置き換えてもいいかもしれません。しかし、親友では句として面白くない。敢えて悪友ということ、一層の親密感が漂いますね。悪友といっても法を犯すような悪行を働くわけではなく、青春のちよつとした悪さでも一緒にできるほど信頼しているのです。故郷にいるかけがえのない悪友。やがて、その悪友とも互いの進路の違いで、離れ離れになるのでしょうか。それを暗示するかのように渡り鳥が故郷の空を切々と飛び去ってゆくのです。

南風頬張るシャツが向かう海

優秀賞の原田千寿さんの作品。季語は「南風」で夏。俳句を作るうえで、擬人法は気を付けなと少し幼稚な表現になったり安易な詠み方になったりしがちです。けれども、この句の「頬張る」という擬人法は新鮮でした。たしかにシャツが風を孕んだとき、頬張るように膨れますね。この句は海に向かっていて、潮風をシャツが頬張っているのです。潮風を孕んだシャツには、生き生きとした夢が詰まっていそうで、これからの人生が海原のように輝き広がっているようです。

佳作の松澤さんの句は、「晩夏光」と「夢に到達する速さ」の取り合わせが光りました。河野さんの句は、物語性を感じ「連れて来い」の命令が力強く響きました。内野さんの句は、どんと焼きの情景を「竹の大砲」で見事に捉えました。白井さんの句は、王朝時代的な「琵琶の

音」が典雅でした。岩見さんの句は、孤独を恐れぬ志をその歩みに見られました。

● 堀本 裕樹（ほりもと・ゆうき）

俳人。一九七四年和歌山県生まれ。「いるか句会」「たんぽぽ句会」主宰。國學院大學卒。第2回北斗賞、第36回俳人協会新人賞受賞。東京経済大学、二松學舎大学非常勤講師。著書に句集『熊野曼陀羅』（文學の森）、『富士百句で俳句入門』（ちくまプリマー新書）、芸人・又吉直樹との共著『芸人と俳人』（集英社）、漫画家・ねこまぎとの共著『ねこのほそみち春夏秋冬にゃー』（さくら舎）、『俳句の図書室』（角川文庫）、シヨートシヨート作家・田丸雅智との共著『俳句でつくる小説工房』（双葉社）などがある。

第21回 全国高校生「創作コンテスト」受賞者一覧

短篇小説の部			
最優秀賞	大貫 瑠香	茨城県立日立北高等学校	3年
優秀賞	紀川 晴好	福岡県立福岡講倫館高等学校	3年
優秀賞	芳岡 未那	山口県立徳山高等学校	3年
佳 作	長谷川佐和	横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校	2年
佳 作	佐藤 朱里	千葉・国府台女子学院高等部	2年
佳 作	生天目咲樹	千葉県立東葛飾高等学校	2年
佳 作	中庭 里沙	大阪府立岸和田高等学校	2年
佳 作	白石 明代	熊本県立御船高等学校	1年
入 選	村田 菜月	東京・朋優学院高等学校	2年
入 選	高橋 芽意	千葉・麗澤高等学校	1年
入 選	岩木ひより	長崎・聖和女子学院高等学校	3年
入 選	坪井 元春	岡山・津山工業高等専門学校	2年
入 選	児浦 利幸	東京・海城高等学校	2年
入 選	草刈 邑依	青森県立弘前高等学校	2年
入 選	原田 真緒	福岡県立明善高等学校	2年
入 選	松原 芽衣	富山県立富山高等学校	3年
入 選	渡邊 奈緒	宮城・常盤木学園高等学校	3年
入 選	梶 智暁	東京・クラーク記念国際高等学校 東京キャンパス	2年

短歌の部			
最優秀賞	桐生 莉緒	東京都立日比谷高等学校	1年
優秀賞	滝澤 昂希	埼玉県立伊奈学園総合高等学校	2年
優秀賞	鶴本 彩花	福岡・西日本短期大学附属高等学校	3年
佳 作	黒田 陽嵩	福岡・西日本短期大学附属高等学校	3年
佳 作	安村 玲美	神奈川・聖ヨゼフ学園高等学校	3年
佳 作	岸本 恵美	大分県立爽風館高等学校	—
佳 作	高草木佑弥	群馬県立太田高等学校	1年
佳 作	保田 千奈	千葉県立安房高等学校	2年
入 選	黒川 琴音	千葉県立安房高等学校	2年
入 選	土屋 文彦	岡山県立岡山城高等学校	2年
入 選	唐澤 智行	東京・クラーク記念国際高等学校 東京キャンパス	2年
入 選	廣井 陽一	沖縄県立真和志高等学校	1年
入 選	駒谷 遥也	大阪市立咲くやこの花高等学校	3年
入 選	南 花瑠乃	埼玉県立浦和第一女子高等学校	1年
入 選	加瀬 詩織	千葉県立安房高等学校	2年
入 選	辻 菜々子	福岡・西日本短期大学附属高等学校	3年
入 選	千味 祐人	埼玉県立上尾南高等学校	3年
入 選	高橋 凜	宮城・常盤木学園高等学校	1年

現代詩の部			
最優秀賞	丸山 優月	神奈川県立麻生高等学校	2年
優秀賞	伊集院亜衣	神奈川県立横浜翠嵐高等学校	2年
優秀賞	山崎 早恵	神奈川県立麻生高等学校	3年
佳 作	関谷 実咲	神奈川県立麻生高等学校	2年
佳 作	金森 悠夏	宮城・聖ウルスラ学院英智高等学校	3年
佳 作	加藤 優奈	埼玉県立鴻巣高等学校	2年
佳 作	宇草 和弥	香川県立観音寺第一高等学校	2年
佳 作	原 唯菜	神奈川県立横浜翠嵐高等学校	3年
入 選	柳田 琴音	埼玉県立深谷商業高等学校	1年
入 選	沖村 南美	群馬県立桐生女子高等学校	1年
入 選	山野あやね	奈良県立奈良北高等学校	3年
入 選	小野木葉月	長野県諏訪清陵高等学校	3年
入 選	村松 苗青	神奈川県立麻生高等学校	3年
入 選	川嶋美沙希	神奈川県立麻生高等学校	2年
入 選	小村 瑠菜	神奈川県立麻生高等学校	2年
入 選	矢田安侑子	神奈川県立麻生高等学校	2年
入 選	内山 綾	東京・麹町学園女子高等学校	2年
入 選	石井 琢朗	岡山・津山工業高等専門学校	2年

俳句の部			
最優秀賞	山下 茜莉	福岡・西日本短期大学附属高等学校	3年
優秀賞	長澤 大我	青森県立七戸高等学校	3年
優秀賞	原田 千寿	福岡・西日本短期大学附属高等学校	3年
佳 作	松澤 茉奈	埼玉県立上尾南高等学校	3年
佳 作	河野 伊吹	鹿児島・ラ・サール高等学校	1年
佳 作	内野 有咲	福岡・西日本短期大学附属高等学校	3年
佳 作	白井 翔	茨城・常総学院高等学校	2年
佳 作	岩見 優志	埼玉・慶應義塾志木高等学校	2年
入 選	村上 瑛	岩手県立水沢高等学校	3年
入 選	大橋 愛香	愛知県立幸田高等学校	1年
入 選	吉本 沙生	京都・同志社国際高等学校	3年
入 選	北村 祐	東京・安田学園高等学校	1年
入 選	福田 星来	長崎・純心女子高等学校	1年
入 選	菅原はなめ	岩手県立水沢高等学校	3年
入 選	松田 将吾	岐阜県立吉城高等学校	1年
入 選	町田 萌絵	神奈川県立麻生高等学校	2年
入 選	宮本 船	東京・芝高等学校	3年
入 選	江崎 美結	福岡・西日本短期大学附属高等学校	3年

文部科学大臣賞	神奈川県立横浜翠嵐高等学校
特 別 学 校 賞	福岡・西日本短期大学附属高等学校
特 別 学 校 賞	神奈川県立麻生高等学校

第21回 全国高校生「創作コンテスト」応募総数

■応募数

	応募高校数	応募人数	作品数
短篇小説	175	537	604
現代詩	107	866	1,378
短 歌	155	1,659	4,200
俳 句	166	5,282	13,108
合 計	(延べ) 603	(延べ) 8,344	19,290

※部門間重複参加校あり

■応募高校数内訳（都道府県別） 4 部門合計

都道府県	応募校数	都道府県	応募校数
北 海 道	10	滋 賀 県	2
青 森 県	5	京 都 府	5
岩 手 県	2	大 阪 府	18
宮 城 県	5	兵 庫 県	6
秋 田 県	1	奈 良 県	1
山 形 県	3	和 歌 山 県	1
福 島 県	8	鳥 取 県	0
東 京 都	67	島 根 県	1
神 奈 川 県	25	岡 山 県	5
千 葉 県	13	広 島 県	7
埼 玉 県	23	山 口 県	5
茨 城 県	17	徳 島 県	2
栃 木 県	8	香 川 県	2
群 馬 県	15	愛 媛 県	3
山 梨 県	5	高 知 県	1
静 岡 県	10	福 岡 県	16
新 潟 県	4	佐 賀 県	1
長 野 県	5	長 崎 県	4
富 山 県	2	熊 本 県	9
石 川 県	4	大 分 県	2
福 井 県	2	宮 崎 県	1
岐 阜 県	4	鹿 児 島 県	6
愛 知 県	21	沖 縄 県	8
三 重 県	3		
合 計		368校	

後記

全国高校生「創作コンテスト」は 今年で第二十一回目を迎えました。今回も「短篇小説」、「現代詩」、「短歌」、「俳句」の四部門に、全国三百六十八校、のべ八、三四四名と数多くの作品が寄せられ、応募作品総数は、一九、二九〇点となりました。

その激戦を制した入賞者七十二名の皆さんが栄ある賞を受賞しましたこと、ここにあらためてお祝い申し上げます。

さて、二十年の歴史を築いてきた本コンテストも二十一回目となり、われわれとしても新たなスタートを切る思いがいたしますが、そのような今年に応募数は過去最多となりました。高校生の皆さんが創作意欲を燃やし、作品を発表できる場として本コンテストが定着してきたことがとてもうれしく、これからもそういった場であり続けたいと改めて強く思いました。

また入賞作品に関して印象的だったのは、作品を作るうえで難しかったこととして、皆さんが一様に「書きたい部分に固執して他がおろそかにならないようにしたい」、「情景をどこまで文字で表現できるか」など、文章を書くうえでのスキルや語彙力に関する反省点を多く挙げていたことでした。人の心をつかむ作品を生んだ皆さんのレベルの高さを垣間見たような気がいたします。

人は、見聞きし体験したことしかアウトプットすることはできないと聞きます。本コンテストへの応募を機に、どうかこれからもたくさんの方の新たな事象に触れ、それらを皆さんの持つ若くエネルギーな感性で表現し続けて欲しいと思います。

最後になりましたが、ご参加いただいた高校生の皆さん、ご指導くださった高校の先生方、選考にあたってくださった審査員の皆様はこの場を借りて心より御礼申し上げます。



高校生新聞®

第21回（2017年度）

全国高校生「創作コンテスト」入賞作品集

発 行 日 平成30年3月1日

編集・発行 國學院大學 総合企画部 広報課

〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28

TEL 03-5466-0130

FAX 03-5466-0528

高校生新聞社

〒194-0022 東京都町田市森野1-34-10

TEL 042-724-2750

FAX 042-724-2710

《第22回創作コンテストお問い合わせ先》

高 校 生 新 聞 社

eメール：contest2018@sclpa.jp